

一般社団法人日本生態学会

No.57

2022年5月

ニュースレター

日本生態学会各賞候補者募集	1
Ecological Research 誌に関するアンケート 2021 結果報告	5
第 70 回日本生態学会仙台大会 (ESJ70) 開催について	8
第 69 回日本生態学会福岡大会 (ESJ69) 開催報告	9
記事	
I. 一般社団法人日本生態学会 2022 年度定時総会、代議員会、各種委員会において 報告・承認・決議された事項	12
A. 報告事項	12
B. 審議事項	22
II. 第 69 回日本生態学会大会記録	27
III. 代表理事（兼会長）と業務執行理事の選任について	31
IV. 書評依頼図書	31
書評	31
日本生態学会役員・代議員・委員一覧	35
京都大学生態学研究センターニュース	39

日本生態学会各賞候補者募集

第21回「日本生態学会賞」

顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たした本法人会員に対して授与される日本生態学会の最も権威ある賞です。受賞者は会員から推薦された候補者の中から選考され、大会時において表彰されます。

第27回「日本生態学会宮地賞」

生態学の優れた業績を挙げた本法人の若手会員を対象とした賞です。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として3名の受賞者を選考し、各々10万円の賞金が贈呈されます。

第16回「日本生態学会大島賞」

野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本法人の会員を対象とした賞です。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として2名の受賞者を選考し、各々10万円の賞金が贈呈されます。

第11回「日本生態学会奨励賞（鈴木賞）」

学位取得後4年くらいまで（大学院生を含む）の今後の優れた研究展開が期待できる研究者に授与される賞です。自薦による応募者の中から原則として3名の受賞者を選考し、各々5万円の賞金が贈呈されます。

記

1. 受賞候補者の条件：本学会員
2. 書式：生態学会ウェブサイト (<https://esj.ne.jp/esj/>) よりダウンロード
3. 送付先：日本生態学会事務局 (office@esj.ne.jp)
4. 締め切り日：2022年8月15日（月）必着

日本生態学会賞細則

- 第1条 日本生態学会賞は、本法人会員で、顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たし、本法人会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、受賞は毎年原則として1名とする。
- 第2条 日本生態学会賞候補者を選考するため、日本生態学会賞候補者選考委員会（以下「委員会」）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は代議員の推薦により9名を選出するが、生態学の各分野に偏りの無いように配慮する。委員長は委員の互選により毎年定める。委員の任期は3年とし、毎年3名を改選する。ただし任期満了後2年間は再任されない。
- 第4条 推薦者は、推薦理由を添えて候補者を推薦するとともに、委員会の求めに応じて必要な資料を提出しなければならない。
- 第5条 委員会は推薦理由をもとに受賞候補者を絞り、推薦者が提出する資料にもとづいて若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、原著論文業績の他に啓蒙的役割を果たした著書類及びそれらの国内外の波及効果に留意する。
- 第6条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第7条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第8条 受賞者の決定は、受賞式が行われる3ヶ月前までに行う。
- 第9条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状及び記念品を贈呈する。
- 第10条 受賞者は、原則として、その授賞式が行われる大会において記念講演し、その内容を本法人の学会誌に総説として投稿する。
- 第11条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会宮地賞細則

- 第1条 日本生態学会宮地賞（以下「宮地賞」という）は、生態学の優れた業績を挙げた本法人の若手会員で、自薦による応募者もしくは本法人会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として3名とする。
- 第2条 宮地賞受賞候補者を選考するため、宮地賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。
- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、本法人会の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無、及び会員歴（日本生態学会の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無及び会員歴を含む）にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。

また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。

第7条 受賞者の決定は授賞式が行われる3か月前までに行う。

第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金10万円を贈呈する。

第9条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本法人の学会誌に投稿する。

第10条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会大島賞細則

第1条 日本生態学会大島賞（以下「大島賞」という）は、野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本法人の会員を対象とし、自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として2名とする。

第2条 大島賞受賞候補者を選考するため、大島賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。

第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。

第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては研究の継続期間や本法人の会員歴（日本生態学会の会員歴を含む）にも留意する。

第5条 選考委員が被推薦者となり選考の最終段階まで候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。

第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。

第7条 受賞者の決定は授賞式が行われる3か月前までに行う。

第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金10万円を贈呈する。

第9条 受賞者は受賞の対象となった研究課題について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説・解説等を本法人の学会誌に投稿する。

第10条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会奨励賞（鈴木賞）細則

第1条 日本生態学会奨励賞（以下「奨励賞」という）は、本法人の会員であり、学位取得後4年くらいまで（大学院生を含む）の今後の優れた研究展開が期待できる研究者で、自薦による応募者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として3名とする。

第2条 奨励賞受賞候補者を選考するため、奨励賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。

第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。

第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候

- 補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、会員歴にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者あるいは推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第7条 受賞者の決定は授賞式が行われる3か月前までに行う。
- 第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金5万円を贈呈する。
- 第9条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本法人の学会誌に投稿する。
- 第10条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

Ecological Research 誌に関するアンケート 2021 結果報告

佐々木晶子・神山千穂・陶山佳久
(Ecological Research 編集部)

英文誌編集委員会では、Ecological Research (ER) 誌創刊 30 周年となる 2016 年に、ER 誌がどのように認識されているのかを理解するため、生態学会会員を対象にアンケートを実施し、その成果を ER 誌において公表した (Tsunoda et al., 2017)。その後、国際的に拡大著しいオープンサイエンスのトレンドに乗じ、オープンアクセス (OA) 誌数が急増するなど、学術雑誌を取り巻く状況が大きく変化している。そこで前回調査のフォローアップに加え、ER 誌の更なる発展に向けて、読者や査読者、編集者といった多様な属性の方のご意見やニーズを把握することを目的として、初回調査から 5 年を経た 2021 年末にあらためてアンケート調査を実施した。実施経緯と結果の一部、関連する国際的な動向については、第 69 回日本生態学会大会においてフォーラム形式で報告を行った (2022 年 3 月 14 日; オンライン)。本稿では、より多くの方々に調査結果を周知したいと考え、アンケート結果の概要とお寄せいただいたご意見の一部をまとめて考察したものをあらためて報告する。

1) アンケート調査実施方法および結果解析方針の概要

全 50 問から成るアンケート (日本語・英語) を作成し、Google Forms を使用して回答を回収した。日本語版は 2021 年 11 月 18 日から 12 月 25 日にかけて、英語版は 2021 年 12 月 25 日から 2022 年 1 月 20 日にかけて実施した。調査告知は、日本生態学会の HP や学会員向けメーリングリストのほか、Jeconet や ER 誌 Twitter にて行い、広く回答を募った。今回の調査では、2016 年の調査内容を踏まえ、1) ER 誌への認知状況や投稿モチベーションを問うほか、2) 編集部/委員会における取り組みについての認知度、3) OA 出版も視野に入れた将来像に関する設問も設けた。

これらの調査結果の解析方針として、2016 年と比較しての変化や、今後の取り組みを検討するうえでの手がかりとなる項目に焦点を当てた。以下にアンケート結果の概要と自由回答例を紹介し、解析方針に従った若干の考察を述べる。

2) ER 誌への認知と投稿モチベーション

全回答者数は 295 名 (英語版回答者数はうち 29 名)、そのほとんどが ER 誌を知る生態学会員であり、さらに半数以上が責任著者としての投稿経験や査読者・編集者としての協力経験を有していた。

現在の年間投稿数や掲載論文の著者所属国については、回答者の多くが現状に近い認識を有していた (図 1)。また「ER 誌の競合誌はどこだと思いますか?」との問いには、国内他学会が出版する英文誌だけでなく、Ecology and Evolution や Oecologia といった国際誌が上

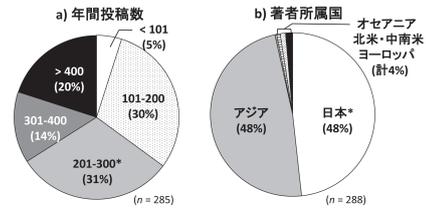


図 1. a) 「ER 誌への年間投稿数は現在いくつくらいだと思いますか?」 b) 「ER 誌ではどの国・地域の著者による研究が多く掲載されていると思いますか?」への回答。アスタリスクは現状を示す。

表 1. ER 誌の競合誌として挙げられた雑誌のうち回答数の多かった上位 10 誌。右列は 2016 年のアンケート結果 (いずれも複数回答可)。

2021 (n = 186)	2016 (n = 173)
①. Population Ecology (69)	①. Population Ecology
2. Ecology and Evolution (29)	②. Journal of Forest Research
3. Oecologia (23)	③. Journal of Plant Research
4. Plant Ecology (20)	4. Oecologia
5. Oikos (19)	5. Oikos
⑥. Journal of Forest Research (18)	6. Acta Oecologica
⑥. Plant Species Biology (18)	7. Ecoscience
⑧. Journal of Plant Research (15)	8. Journal of Ecology
9. Acta Oecologica (13)	9. Plant Ecology
10. PLOS ONE (9)	10. Basic and Applied Ecology

○は国内学会英文誌、()内の数値は回答数を示す。

位を占めていた (表 1)。

回答者が ER 誌へ投稿する際のモチベーションは、「是が非でも ER 誌」「できれば ER 誌」が計 34% で、「どこでもよい」(25%) や「できれば他誌」(22%) とやや拮抗するものの、2016 年時と比較すると前向きな回答数が増加していた (図 2)。投稿意欲の高い回答者は、その理由として「国内・日本人研究者へのアピール力の高さ」を、逆に投稿意欲の低い回答者は「海外へのアピール力に欠ける」ことを挙げており、期待するアピール先が投稿モチベーションを左右していることがうかがえた。今後の ER 誌への投稿予定が「ある」「なくはない」

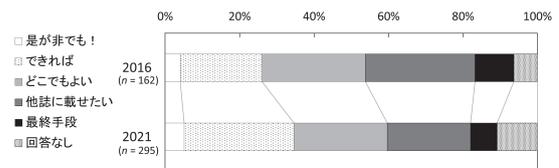


図 2. 「投稿先を ER 誌とする際のモチベーションとして、最も近いもの一つを選んでください」への回答と 2016 年アンケート結果との比較。

表2. ER誌への投稿モチベーションに関する自由回答例。

投稿意欲の高い回答者:
・ 特集号や受賞総説のための投稿、データペーパーがある
・ 日本生態学会に貢献したい
・ 日本発の生態学誌としての独自性と価値を感じている
投稿意欲の低い・投稿経験の無い回答者:
・ もっと分野を絞った雑誌の方が読者・編集者がより興味を持つ
・ 日本国内向けというイメージが強い、国際誌扱いされない
・ 国際的認知度やインパクトファクターに比して査読が厳しい

とする回答は全体の70%以上を占め、こちらも2016年(63%)より上昇した。投稿モチベーションや見込み、競合他誌についての回答、それらの前回調査との比較から、ER誌に対する関係者の評価がポジティブに変化しつつある傾向が見てとれた。投稿モチベーションについての自由回答例は表2のとおりで、投稿意欲の高い回答者では、特集号や独自カテゴリが投稿のきっかけとなることや、生態学会員としてER誌を支持、あるいは貢献したいという思いが述べられていた。一方、意欲の低いあるいは投稿経験の無い回答者からは、自身の研究内容とのマッチング、国際誌としての評価、査読姿勢に疑問を感じていることが指摘された。

投稿モチベーションに関連して、編集部/委員会における検討課題を探るため、「今後投稿の見込みや意気込みがある原稿カテゴリ」のほか、「投稿を検討しつつも躊躇っているカテゴリ」と「その理由」を問うた。その結果、Original articlesに加えてER誌が独自に設けている原稿カテゴリ(Data papers¹)、Biodiversity in

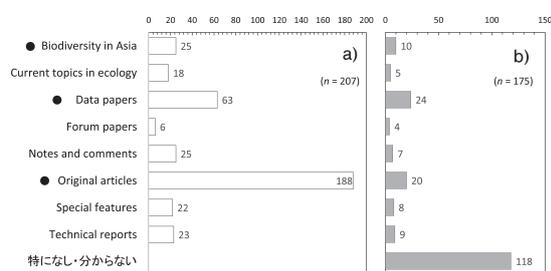


図3. a) 投稿見込みや意気込みのある原稿カテゴリと、b) 投稿を検討しつつも躊躇っているカテゴリについての回答(複数回答可)。●は回答数の多かった項目を示す。

表3. 「投稿を検討しつつも躊躇っているカテゴリ」と「その理由」に関する自由回答例。

カテゴリ	理由
Original articles	・ 求められるクオリティが分からない ・ 査読が厳しそう
Current topics in Ecology	・ まずはインパクトファクターの高い雑誌へ投稿したい
Special features	・ 準備するエフォートが割けない
Technical reports*	・ 引用されなさそう
Notes and comments*	・ 文字制限 ・ Original articleとの差別化が難しい
Data papers*	・ 必要なデータ量、ボリュームが分からない
Biodiversity in Asia	・ 対象や基準が分からない

太字は回答数の多かったカテゴリを示す。
*2022年(vol. 37)以降、出版社の方針によりそれぞれTechnical notes、Notes and insights、Data articlesへ改称された。

Asia)への関心の高さと、投稿を躊躇う原因のいくつかを把握することができた(図3、表3)。この結果を受けて、今後独自カテゴリの対象及び審査基準の明確化や、投稿から査読過程における著者の負担軽減、サポートの充実、それらについての情報発信といった取り組みを進める必要があると考えられた。これらの対応により、関係者の関心を高めるとともに、著者が感じる投稿へのハードルを下げ、投稿数増加につなげられる可能性が見いだされた。

3) 編集部/委員会の取り組みに対する意見・ニーズ

編集部/委員会では、掲載論文の質向上や情報発信、査読所要期間の短縮、投稿から出版過程における著者の負担緩和等を目的とした様々な取り組みを行っている。これらについて「今後より力を入れるべきだと思う項目」と「その理由」を問うたところ、特に「掲載論文に関する情報発信」「投稿フォーマットの規定緩和」「受賞論文・ERシンポ論文のOA費補助」が支持を得た(図4、表4)。「情報発信力強化」に向けた取り組みについては、「記事の質向上」と「オープンアクセス(OA)等の推進」を支持する回答者が多かった。またそのほか自由回答として、独自性や査読体制の強化による他誌との差別化、あるいは積極的なプレスリリースによる情報発信等の提案が寄せられた(図5、表5)。さらにER誌独自のWebサイトやSNS(Twitter)の活用についても、表6のとおり改善に向けた具体的なお意見、ご提案を多く頂いた。

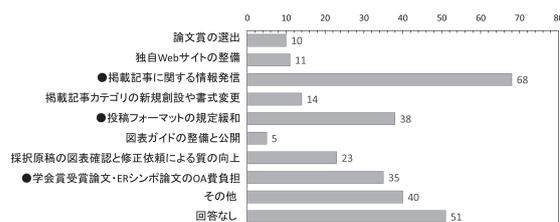


図4. 「今後より力を入れるべきだと思う取り組みの一つ選択してください」への回答(n=295)。●は回答者数の多かった項目を示す。

表4. 「今後より力を入れるべきだと思う取り組み」に関する自由回答例。

取り組み	理由や要望
論文賞選出	・ 投稿モチベーションがあがる ・ もっと賞の数を増やしてほしい
独自Webサイトの整備	・ HPの体裁が古い、デザインに工夫が必要
掲載記事の情報発信	・ SNSで最新論文をチェックする研究者が増えている(特に海外で) ・ 多言語化して欲しい(日本語要旨等の情報発信)
カテゴリの新規創設や書式変更	・ 情報の幅を広げ、投稿数増加につながる ・ ER誌の独自性、魅力を高める ・ 対象とする分野、分類群、カテゴリの再考 ・ 特集号の充実、レビューやデータペーパーの投稿促進
投稿フォーマットの規定緩和	・ 他誌リジェクト後の再投稿の負担減 ・ 投稿のハードルが下がると、投稿数が増加する
図表ガイドの整備と公開	・ 掲載場所が分かりづらい
採択原稿の図表確認と修正依頼	・ 図表修正依頼の厳しさを緩和してほしい ・ 採択後に著者に与えられる時間に余裕を
学会受賞論文・ERシンポ論文のOA費負担	・ よい論文の周知、宣伝は読者の利益にもなる ・ IF上昇、投稿モチベーションにつながる ・ OA費の減額、会員のOA費の減免、OA枠の拡充

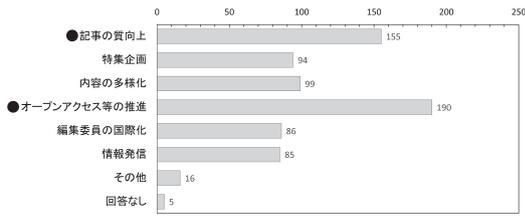


図5. 「情報発信力をより強化するためには、今後どのような取り組みが重要だと思いますか？」への回答 (n=295)。●は回答者数の多かった項目を示す。

表5. 「情報発信力強化のために重要と考える取り組み」に関する自由回答例。

・ 競合誌との相違点やカテゴリ等の特色の明確化
・ 査読の質の高さ・透明性などによる他誌との差別化
・ トピックを厳選、アクセプト率を下げる等によりIF向上
・ レビューやオピニオンペーパーを招待
・ プレスリリースを積極的に行う
・ 日本語情報の充実

表6. 「Webサイト・Twitterで発信してほしい情報」への自由回答例。

・ 著者情報の充実(本人による解説、著者アカウント、個人サイトへのリンク)
・ 編集者からの発信(Editor's choice、投稿してほしいテーマ等への意見記事)
・ 過去論文の掘り起こし
・ アクセス数、ダウンロード数、被引用回数、オルトメトリクス解析を指標とした論文紹介、宣伝
・ プレスリリースを積極的に行う
・ 日本語による解説
・ 他学会との連携状況
・ WebサイトとTwitterの連携、すみわけ

4) ER誌の将来像に関する声

近年、世界的に学術雑誌数が増加していることに加え、出版体制として購読モデル²⁾からオープンアクセス(OA)出版モデル³⁾への転換をめざす動きが急速に広がっている。今回のアンケートでは、このような背景と、学会として英文誌の出版体制や将来のありかたを検討する必要が生じていることを説明したうえで、回答者の意見や経験を聞いた。

まず出版形式について、「あなたは自身が筆頭あるいは責任著者の立場にある論文を、OA出版したことがありますか?」、「今後、自身が筆頭あるいは責任著者の立場にある論文を、OA出版したいと思いますか?」との問いに対しては、それぞれ55%、65%が「はい」と回答し、論文のOA化が著者ベースで普及しており、回答者の過半数が肯定的に捉えていることが示された。自由回答例としては、被引用数増加につながるなど、発信力に期待する声のほか、コストについての懸念や、セルフアーカイブの活用に関する意見が見られた(表7)。

「あなたが考えるOA出版のメリット・デメリットについて聞かせてください」との問いへは、表8に示すとおり様々な意見が寄せられた。特に、雑誌に対する評価への影響について、投稿数や掲載論文の質が「向上する」/「低下する」と、相反する予想が示された点は興味深い。また現在ER誌は購読モデルをもとに出版しているが、「今後OA出版モデルへの転換を目指すべきだと思いますか?」への回答結果から、

表7. 「OA出版への意気込み」と「その理由」への自由回答例。

意気込み	理由
したい	<ul style="list-style-type: none"> ・ アクセスの公平性、オープンサイエンス推進 ・ 被引用数の増加、国際的評価、アピールにつながる ・ 出版プロセスが速い、出版後の管理が楽 ・ 所属機関での推奨、義務化 ・ よい雑誌であれば、予算があれば
したくない	<ul style="list-style-type: none"> ・ 掲載コストが大きい ・ 研究費の無駄遣い、学生の研究に使いたい ・ セルフアーカイブで十分
分からない	<ul style="list-style-type: none"> ・ 資金的余裕、掲載コスト次第 ・ 雑誌、投稿規定、論文テーマ次第 ・ 必要性をあまり感じない(セルフアーカイブ)
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ 資金的余裕次第 ・ 助成金等により掲載コストが軽減されれば

表8. 「OA出版のメリット・デメリット」に関する自由記述例。

メリット	デメリット
著者としての視点: <ul style="list-style-type: none"> ・ アクセスの公平性 ・ 読者数増加・被引用数の増加 ・ 査読プロセスがはやい ・ 社会貢献 	著者としての視点: <ul style="list-style-type: none"> ・ 出版コスト、研究費を圧迫 ・ 研究者間格差をうむ(資金が少ない研究者や若手は不利)
雑誌としての視点: <ul style="list-style-type: none"> ・ 国際的プレゼンス向上 ・ 雑誌のIFや投稿数増加、質向上への期待 ・ 論文不正の抑制 	雑誌としての視点: <ul style="list-style-type: none"> ・ 投稿数減少や査読の質、雑誌の質低下の懸念 ・ 投稿者の多様性を制限(国間格差)
問題点・その他 <ul style="list-style-type: none"> ・ 日本ではOA費の助成、機関負担制度が整備されていない ・ セルフアーカイブ等、論文を無料で広く読んでもらえる手段はある ・ 「業績をお金で買った」「査読プロセスがいい加減な雑誌」等、研究者によるOA出版への解釈の相違 ・ 海外、出版社への公的資金流出では? 	

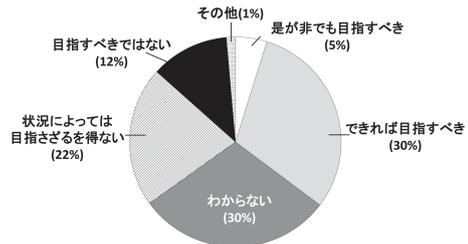


図6. 「ER誌は現在購読モデルとして出版されていますが、今後オープンアクセス出版モデルへの転換を目指すべきだと思いますか?」への回答 (n=295)。

すか?」との問いに対しては「目指すべきではない」「分からない」とする慎重な意見と、「目指すべき」「是非でも目指すべき」とする前向きな意見が拮抗していた(図6)。これらの結果から、今後編集委員会および学会として出版体制を検討する際には、今回指摘された懸念等について、他雑誌の動向把握に努める他、様々な影響や可能性を考慮して慎重に議論を重ねていくことが必須であると考えられた。

最後に、ER誌の目指すべき将来像について、「そもそも学会として今後も英文誌出版を継続すべきだと思いますか?」との問いには70%以上の回答者が「是非が比でも/出来れば継続すべき」とし、英文誌出版そのものについては明確なニーズを確認できた。また「あなたが、今後ER誌が目指すべきと考える将来像・方向性に該当する項目を一つ選択してください」への回答結果から、

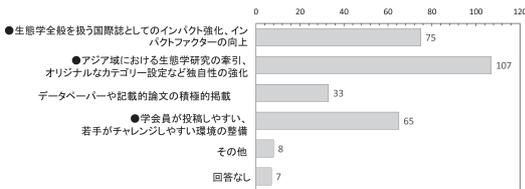


図7. 「今後ER誌が目指すべきと考える将来像・方向性を一つ選択してください」への回答 (n = 295)。●は回答者数の多かった項目を示す。

ER誌の中長期的なありかたとして「生態学全般を扱う国際誌としてのインパクト・独自性の強化及び、インパクトファクター向上」と「学会員、若手が投稿・チャレンジしやすい体制」を共存させながら「アジア域における生態学研究を牽引する雑誌」を目指す」との将来像を見出すことができた(図7)。これは、2016年以降編集部/委員会が掲げてきた方向性(Tsunoda et al., 2017)を踏襲するものであるが、昨今の学術誌を取り巻く急激な変化を踏まえたうえで、関係者の意見をあらためて確認できた意義は大きい。今後は、さきにも示した「掲載論文の質向上、それらに関する情報発信、OA化推進」「査読体制の強化・国際化」「独自カテゴリーに関する基準の明示・投稿招待」といった項目を具体的な取り組みに落とし込み、多くの方にとって望ましいER誌としていくことが求められる。



第70回日本生態学会仙台大会 (ESJ70) 開催について

2023年3月開催予定の第70回日本生態学会大会(仙台)については、新型コロナウイルスの感染拡大にともなう社会状況に鑑み、授賞式・受賞記念講演のみハイブリッド開催、そのほかはオンライン開催とします。会期は、2023年3月17～21日の予定です。具体的な大会案内(実施概要)につきましては改めてお知らせいたします。

謝辞：

アンケート調査にご協力いただいた多くの皆様に深く感謝するとともに、ER誌の更なる発展に向けて、多くの方からの活発なご投稿や企画のご提案をお待ちしています。

引用文献：

Tsunoda, T., Kusumoto, B., Okada, K., Aoshima, Y., Kume, A. (2017) The 30th anniversary of Ecological Research: past, present, and future. Ecological Research, 32, 451-457. doi:10.1007/s11284-017-1457-0.

脚注：

- 1) 2022年(vol. 37)以降、出版社の方針により Data articles へ改称された。
- 2) オンライン上や紙媒体で論文を読むために読者(購読機関である図書館等)が費用を支払う仕組み。
- 3) 読者や購読機関ではなく、論文執筆者側(所属機関や資金提供者を含む)が出版費用を支払う仕組み(例:PLOS ONE、Scientific Reports など)。

第 69 回日本生態学会 福岡大会 (ESJ69) 開催報告

高橋佑磨 (大会企画委員会 前委員長)

第 69 回日本生態学会大会 (ESJ69) は、2022 年 3 月 14 日～19 日の 6 日間の日程で開催されました。シンポジウムや自由集会、公開講演会を現地にて開催することを前提としたハイブリッド大会として準備を進めていましたが、新型コロナウイルス感染症の感染状況に鑑み、結果的には完全オンラインの開催となりました。大会 1 ヶ月での開催形態の変更などもあり、不安もありましたが、大きなトラブルもなく大会を終えることができました。大会をスムーズに進行できたのは、他でもなく、大会実行委員会のみならず、アルバイトのみならず、また、配信業者の方々の工夫と多大なる努力のおかげです。この場を借りて御礼申し上げます。一方で、学会としては、岡山大会に続く 2 回目の完全オンライン大会である同時に、参加者の皆さんがさまざまな学会でオンライン大会の経験を積んできたこともあり、トラブルを未然に防ぐことができたのだとも感じています。

さて、2021 年 4 月に第 69 回日本生態学会大会 (ESJ69) の大会企画委員会が始動しました。このころは、新型コロナウイルス感染症との戦いも 1 年以上となり、非医療従事者や非高齢者へのワクチン接種がまもなく開始されるというような状況でした。ワクチンへの期待も大きく、2022 年 3 月であれば完全現地開催は無理にしても、ハイブリッド大会ならば実施可能だろう、という淡い期待が多かれ少なかれ、あったように思います。一方で、大会の現地開催が 2 回連続で見送られたこともあり、会員間の交流、特に若手会員のネットワークづくりが妨げられている状況を企画委員会の多くのメンバーが感じていました。ESJ69 の開催形態については、学会執行部と大会企画委員会、大会実行委員会が中心となり組織された ESJ69 タスクフォース会議で議論され、「可能な範囲で現地開催のコンテンツを増やしていく必要がある」というのが当該会議の多くのメンバーの意見だったと記憶しています。

とはいえ、誰もがオンラインの良さも感じていました。旅費もかかりませんし、移動時間もかかりません。本務の仕事の隙間時間に講演を聞くことだってできてしまいます。子育てなどのさまざまな理由で、現地に行くことが困難な人も参加しやすいはず。海外の研究者に講演を依頼することも気軽になります。オンラインのほうが良いと思う人々も少なくないと思います。メインの学会でなければ、私も、オンラインのほうが助かるかもしれません。このように、「オンラインで参加/講演する」ことのニーズはとて大きいものでした。したがって、オンライン参加やオンライン講演のオプションをなくすべきではないというのが私をはじめほとんどの大会企画委員会メンバーの意見でした。多くの方が、オンサイトの良さやオンラインの良さを同時に感じていたわけです。必然的に、ESJ69 では、数年以内にやってくるであ

ろう「ポストコロナ時代の大会」を見据えながら、大会企画を進めていく必要があるという認識に至りました。「新しい大会」へと生まれ変わるための第一歩となるような大会にすべきだと感じましたし、少なくとも、そのようなターニングポイントに立っているという空気感がありました。

新しい大会としてのハイブリッド形式とさまざまな試み

対面での議論は、何にも代えがたいワクワクがあります。カメラを前にしたオンラインでの会話とは違って、対面での他愛もない会話もまた、驚くような発見につながったりします。夜の飲み会は、情報収集やネットワークづくりの一番の場になっていたりするかもしれません。飲みニュケーションは古い文化と言われたら、そうかも知れませんが、だとしても、対面での雑談や議論には、少なくとも現代のテクノロジーでは補えない大きな価値があるように思います。一方で、多様な潜在参加者の多様なニーズに応えることも重要です。オンライン開催のニーズと現地開催のニーズのバランスは、年々変わっていくとは思いますが、2つのニーズが共存し続けることが確かである以上、「ハイブリッド開催」というのがポストコロナを含めた大会のあるべき開催形態だと考えるのが自然でした。このような背景もあり、ESJ69 は、ハイブリッド形式での開催を目指すことが比較的スムーズに決定しました。もちろん、新型コロナウイルス感染症がいつ再拡大するかわからない状況は続いていましたので、「完全オンライン化」がいつでも可能な大会として準備を進める、という「条件付き」ではあります。また、新型コロナウイルス対策として、現地参加可能な人数を 1000 人までとしました。これは、通常の場合の会場の収容人数の 50% の値になります。1 席間隔で着席することが可能な最大数です。

一方で、「より多くの方が楽しめる大会」、すなわち、「ダイバーシティーに配慮した大会」を目指すことをもう一つのテーマとしました。そのためにいくつかの新たな試みをしてきました。まずは、先述のように、ハイブリッド形式での開催です。参加者が現地参加とオンライン参加を選択できるというだけでなく、現地に来て、オンラインでもすべての発表を視聴することができるようにすることとしました。さらには、現地で行なわれるシンポジウムや自由集会についても、リモート（オンライン）での発表を選択することができるようなシステムを準備しました。また、見逃し配信を行なうこととしました。会期中の講演をすべて録画し、公開の可否を確認した上で大会終了後一ヶ月半程度の期間、プラットフォームから視聴できるようにしました。これにより、日中の参加が難しい方々や夜の自由集會に参加するのが難しい方々が好きな時間に講演を視聴できますし、リアルタイムで

聴いていた発表の「裏番組」を視聴することもできるようになります。さらに、時差の影響を緩和するため、日本国外に居住する参加者には、講演時間帯の希望調査を実施し、講演スロットを決定する際に、可能な限り配慮しました。その他にも、シンポジウムや自由集会の募集要項に「ジェンダーや国籍、立場などの多様性に配慮して集会内の講演者を構成する」という文言を加えたり、色弱者への配慮を促すような文言や具体的なデザイン上の工夫の解説を大会案内には加えたりしました。「ふらっ」と参加したい人のために、「当日参加」も可能としました。これらの試みは、ダイバーシティへの配慮という点で一定の効果があったものと期待しています。

大会の全体像と参加者、講演数、集会数

ハイブリッド大会といってもいろいろなスタイルが考えられます。これまでの大会をそのままハイブリッド(すべての講演を現地でもオンラインでも聴くことができる)にすることも可能ですが、新型コロナウイルスの蔓延状況を考えると、ポスター発表を現地開催するという選択肢はありませんでした。また、5日間ずっと会場を利用したり、その期間ずっと現地から配信を行ったりすることは、費用的に無理がありました。そこで、本大会では、完全オンラインの部分とハイブリッドの部分からなる変則的なハイブリッド開催とすることとしました。ただし、このようなスタイルでは、5日間ですべての発表や集会を5日間で消化することが困難になります。なぜなら、現地参加者が、職場(自宅)と現地を移動する「移動日」を設ける必要があるからです。そこで今大会は、最初の2日間でポスター発表と口頭発表、受賞講演などを完全オンラインで開催し、その後1日の移動日を挟んで最後の3日間でシンポジウムや自由集会、公開講演会を開催することとしました。

ちなみに、例年、各種受賞講演は、他の講演と並行せずに行なってきました。今大会では、「録画+見逃し配信」を行なうことを前提とし、複数の受賞講演を並行して行なうこととしました。大変心苦しい決断とはなりましたが、これにより時間を節約することができました。ここで節約した時間は、今大会では「バーチャル雑談会」の時間として活用しました。私個人的には今大会の目玉企画の一つであり、各セッションのあとに SpatialChat を用いた雑談会場を用意し、現地開催で行なわれていた「廊下での雑談」や「ロビー活動」ができるようになりました。バーチャル雑談室への入室者数が伸び悩んだことは残念でしたが、利用してくださった方はとても楽しんでいただいていたと感じています。慣れてくれば「リアル」と同じように雑談を楽しめました。学会員の交流の場を提供できたのであれば、嬉しい限りです。なお、SpatialChat を用いたバーチャル空間は、モアイ(若手と先輩生態学者の交流)の会場として使われたり、大会賞の授与式の会場、大会の公式懇親会の会場としても活用しました。

さて、講演数や参加者数などの客観的なデータにも触れておこうと思います。今大会は、一般講演は、1083件(ポスター発表:848件、口頭発表:235)。集会の数は、シンポジウムが28件、自由集会が23件、フォーラムが

9件となりました。一般講演数や集会数は、最近10年程度の中では平均的な数です。ESJ68では、はじめてのオンライン大会ということで、集会の開催などに躊躇した方も多かったかもしれませんが、ESJ69ではコロナ以前の規模の発表数に戻ったという印象です。一方で、今大会の参加者数は、一般や学生、高校生などを含めて、2712人となりました(一般参加者が1093人、有料の学生参加者が861人、招待講演者が47人、発表のない学部生と高校生をあわせて694人、その他17人)。参加者数としては、過去最大級です。オンライン参加・講演を可能にしたことや見逃し配信に対応したことなどが、功を奏したのかも知れません。なお、現地参加の希望者は約600人となりました。新型コロナウイルス感染症の収束が見通せない状況での希望であることを考えると、十分に多い人数だと感じています。また、シンポジウムと自由集会については、ほとんどが現地開催を希望していました(現地開催とオンライン開催のどちらでも可能、という希望を含む)。いずれにせよ、現地参加や対面でのディスカッションへの期待感が非常に大きいことを再確認できました。

オンライン化決定の経緯

ハイブリッド開催の可否については、大会の1ヶ月前には、参加者に周知するという方針が年明けに決定しました。その決定を受けて、2月初旬から現地開催部分の実現可能性についてのESJ69タスクフォース会議にて議論が始まりました。ちょうどその頃は、過去最高の感染者数を日々更新するような第6波の真っ只中でした。一方では、当初よりは重症化のリスクも減ってきていたり、第6波のピークも見えてきたような状況でもありました。ちょうど同じ頃実施した現地参加希望者へのアンケートでも、多くの現地参加希望者は、依然として現地参加を希望していることがわかりました。このようなアンケート結果も後押しし、一旦は、ハイブリッド形態での開催を執行するという決断を下しかけたのですが、最後に、大会実行委員会が中心となり実現可能性を検討するとなりました。結果として、高い感染リスクに曝される現地スタッフ(実行委員会の皆さんやアルバイトの皆さん)の安全を確保することが難しく、さらには、現地スタッフや動画配信業者のスタッフで感染が広がれば、大会を実施することが不可能になり、現地開催部分が「中止」になる可能性も否めないとの意見が出ました。まったくその通りです。参加者の想いを考えると非常に難しい判断となりましたが、「完全オンライン」での開催を決断することとなりました。

課題と展望

今大会は、いつでも完全オンライン化ができるように準備を進めてきました。そのため、1ヶ月前にオンライン化が決定しても、大きなトラブルなどはほとんどありませんでした(現地スタッフの仕事内容の変更や配置変更などはもちろん生じてしまいます)。なお、いわば「二重」に準備することは、大変だと思われがちですが、ハイブリッド大会を準備していれば、システム的には、完

全オンライン化の準備も同時にできてしまいます。ですので、準備段階では、二重の準備はそれほど負担となりませんでした。ただし、もちろん、ハイブリッド形式で開催する準備をすることの大変さは多くありました。単にzoomに全員が接続すればよいだけのオンライン形式とは違い、現地でスライドを投影しつつ、配信するというのは、技術的にはとても大変ですし、現地参加者もオンライン参加者も退屈しないようなスケジュールを考えねばなりません。プラットフォームの選定や大会スケジュールの検討、会場レイアウトの検討など、ほとんどすべてについて、多様な参加スタイルへの配慮が必要になります。これは骨が折れる作業でした。このあたりの負担をいかに減らしていくかということは、今回見えてきた問題点です。今後、ポストコロナ時代にハイブリッド大会が主流となれば、乗り越えねばならない課題の一つだと感じます。

ハイブリッド形式での開催は、費用面でも問題が多く出てきます。オンラインでも発表が聴けるようにするための「大会プラットフォーム」や「ビデオ会議システム（zoomなど）」に使用料金が発生すると同時に、会場を借用する費用（ただし、会場利用期間が短縮されるのでこれまでの現地開催のときよりは安い）、会場から生中継するための費用など、出費が多くなります。結果として、参加費が高くなるざるを得ません。今大会では、事前登録の場合は一般が13,000円、学生が5,000円となりました。当日参加ならば、一般が15,000円、学生が6,000円です。過去の大会の中では、もっとも高額であったと思われます。運営のための支出をいかに減らしていくか、あるいは、ハイブリッドならではの付加価値をどれだけ増やしていけるかが、大会運営の点では鍵となりそうです。今大会のように、見逃し配信に対応したことは、大きな付加価値になったと思います。

今大会では、残念ながら、初のハイブリッド大会を実施するという目標は叶えられませんでした。そのため、実際に、ハイブリッド大会が計画通りうまくいくのか、それとも私たちの計画は不十分だったのかは判断できません。近い未来で主流になるであろう「ハイブリッド大会」をうまく運営していくためにはまだまだ経験不足だと感じています。現地の参加者とオンライン参加者がどうしたら一体感を感じられるか、どうしたらオンラインのポスター発表がもっとやりがいのあるものになるのか。多様化するニーズと、進歩する技術の中で、今後の大会がどんなふうに進化していくのか、楽しみにしています。

謝辞

最後になりましたが、今大会の準備と運営にあたりお世話になった以下の方々には厚く御礼申し上げます。

粕谷英一さん（大会会長）、佐竹暁子さん（大会実行委員長）、細川貴弘さん（大会実行副委員長）をはじめとする福岡大会実行委員会のみなさま、実行委員会の潮雅之さん（運営部会長）、榎木勉さん（発表編成部会長）、小山明日香さん（シンポジウム部会長）、吉竹晋平さん

（ポスター部会長）、中濱直之さん（高校生ポスター部会長）、深澤遊さん（英語セッション部会長）をはじめとする大会企画委員のみなさま、学会執行部、事務局のみなさまに心から感謝いたします。中でも、私とほぼ二人三脚で準備を進めてくださって潮さんには感謝してもきれません。今大会は、例年からの変更点も多く、準備段階での労力が多かったかもしれません。しかし、今回のような挑戦や試行錯誤は、今後の日本生態学会の発展のために、負うべき負担であると確信していました。未来志向のさまざまなチャレンジをこのようなメンバーとともにできたこと、とても嬉しく、また誇りに思います。

各種審査員を務めてくださったみなさまにも感謝申し上げます（順不同、敬称略）。

ポスター賞：阿部晴恵、安達修平、安部哲人、安房田智司、井手竜也、永松大、奥崎穰、下野嘉子、河内香織、柿岡諒、鎌倉真依、甘田岳、岸田治、岸本圭子、岸茂樹、吉田丈人、吉田智弘、宮本麻子、橋本佳延、橋本佳明、橋本啓史、饗庭正寛、近藤倫生、金森由妃、金田哲、栗原洋介、栗山武夫、原朱音、原野智広、源利文、戸田求、綱本良啓、荒木希和子、香川幸太郎、高橋一男、高木健太郎、黒川紘子、今井亮介、佐藤安弘、佐藤光彦、斎藤昌幸、坂本佳子、阪口翔太、山浦悠一、山道真人、持田浩治、小高信彦、小泉逸郎、小林慶子、小林峻、小林知里、松崎慎一郎、上原歩、上田恵介、上野真由美、森田健太郎、森嶋佳織、深谷肇一、深町加津枝、須藤正彬、瀬戸蘭美、西田有佑、石井博、赤路康朗、相場慎一郎、村上健太郎、太田菜央、大澤剛士、池上真木彦、池川雄亮、池田紘士、竹下文雄、中西康介、中田兼介、中林雅、長谷和子、長田穰、辻井悠希、辻大和、辻本克斗、鶴井香織、東若菜、徳田誠、徳本雄史、内田健太、楠本良延、入江貴博、梅村光俊、梅木清、白川勝信、八木光晴、福井翔、福島慶太郎、兵藤不二夫、平山大輔、平川浩文、本間淳、木村恵、友常満利、嶺田拓也、鈴木まほろ、鈴木重雄、鈴木俊貴、和田哲、檜谷昂、澤井宏太郎、他匿名希望44名

英語口頭発表賞：赤坂宗光、岩井紀子、池田紘士、安藤温子、鶴井香織、佐藤拓哉、京極大助、鏡味麻衣子、大園享司、松岡俊将、山道真人、鈴木紀之、今田弓女、三木健、瀬戸蘭美、伊藤公一、瀧本岳、内田圭、小出大、小山明日香、吉岡明良、塩尻かおり、平岩将良、深野祐也、中臺亮介、金谷弦、内田義崇、小林秀樹、中川光、相場慎一郎、門脇浩明、Ales Bucek、河端雄毅、高須賀圭三、長谷和子、種子田春彦、小野田雄介、小口理一、長田典之、加藤顕、榎木勉、鈴木智之

高校生ポスター賞：奥田圭、岡田龍也、吉田誠、高木俊、小峰浩隆、西脇亜也、石井潤、竹下文雄、板垣智之、樋口裕美子、富松元、武山智博、武田和也、矢井田友暉、立脇隆文、宮田理恵、佐賀達矢、篠原直登、酒井聡樹、勝原光希、城野哲平、太田謙、中村圭司、中臺亮介、藤岡春菜、畑田彩、片山直樹、頼末武史、渡邊謙太、田川一希、松本哲也、他匿名1名

記事

I. 一般社団法人日本生態学会 2022 年度定時総会（第 69 回大会会員総会、21 年 3 月 20 日、代議員 21 名、会員 136 名参加）および代議員会、各種委員会において報告・承認・決議された事項

A. 報告事項

1. 事務局報告

a. 2021 年度会員数・学会誌発行状況

日本生態学会誌 71 巻

	1 号	2 号	3 号
発行部数	300	300	300
配本部数	273	279	277
残部数	27	21	23

保全生態学研究 26 巻

	1 号	2 号
発行部数	940	930
配本部数	903	892
残部数	37	38

Ecological Research Vol.36

	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6
発行部数	110	110	110	110	110	110
配本部数	110	109	108	109	110	110
残部数	0	1	2	1	0	0

会員数

	2020 年 12 月末現在			2021 年 12 月末現在		
	一般	学生	合計	一般	学生	合計
北海道	256	148	404	256	145	401
東北	167	110	277	164	101	265
関東	993	419	1412	992	380	1372
中部	366	176	542	355	171	526
近畿	459	345	804	465	306	771
中四国	192	63	255	185	63	248
九州	220	93	313	225	89	314
外国	47	29	76	42	14	56
小計	2700	1383	4083	2684	1269	3953
賛助			70			70
名誉			7			7
小計			77			77
合計			4160			4030

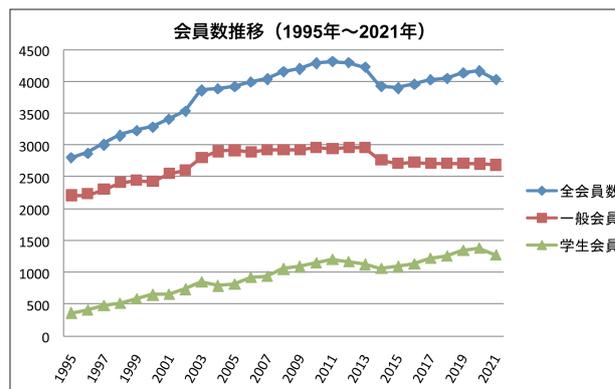
会費納入率（各年 12 月末現在）

	2020 年		2021 年	
	一般	学生	一般	学生
北海道	94.9	75.0	94.5	72.4
東北	94.6	79.1	96.3	71.3
関東	92.7	75.9	93.3	70.8
中部	94.3	76.1	92.1	69.0
近畿	92.6	75.9	93.3	74.8
中四国	93.2	81.0	95.1	74.6
九州	94.5	74.2	94.2	67.4
海外	74.5	24.1	59.5	35.7
全体	93.1	75.1	93.1	71.3

雑誌不要者数変遷（各年 12 月末）

	一般					学生				
	会員数	生態誌不要	ER 不要	会員数	生態誌不要	ER 不要	会員数	生態誌不要	ER 不要	
2008	2725	107	4%	146	5%	1021	80	8%	85	8%
2009	2740	171	6%	215	8%	1061	148	14%	157	15%
2010	2582	321	12%	419	16%	952	221	23%	239	25%
2011	2738	371	14%	478	17%	1175	339	29%	364	31%
2012	2760	478	17%	606	22%	1135	407	36%	431	38%
2013	2757	531	19%	679	25%	1097	477	43%	501	46%
2014	2765	614	22%	789	29%	1054	495	47%	528	50%
2015	2707	623	23%	811	30%	1069	522	49%	563	53%
2016	2729	726	27%	952	35%	1130	716	63%	633	56%
2017	2713	830	31%	1054	39%	1220	783	64%	844	69%
2018	2710	964	36%	2698	99.6%	1253	896	72%	1253	100%
2019	2706	1041	38%	2684	99.2%	1346	1054	78%	1335	99.2%
2020	2700	1109	41%	2678	99.2%	1383	1134	82%	1366	98.8%
2021	2684	2580	96%	2664	99.3%	1269	1214	96%	1250	98.5%
2022	2566	2468	96%	2549	99.3%	1258	1192	95%	1241	98.6%

※2013 年までは AB 会員数



b. 庶務報告（2021 年 4 月～2022 年 2 月）

- 日本学術振興会より令和 3 年度科研費（国際情報発信強化 A）の内定通知があった（H30 年度より 5 年間交付、令和 3 年度 12,600,000 円）（4 月 1 日）
- 日本学術振興会より令和 3 年度科研費（公開講演会）について不採択通知があった（4 月 1 日）
- 琵琶湖賞運営委員会により第 21 回生態学琵琶湖賞受賞者として源利文氏と吉田丈人氏の受賞が決定した（4 月 16 日）
- 法務局にて 2021 年定時総会にて就任した理事・監事交代を申請し登記された（4 月 26 日）
- 日本学術振興会へ令和 2 年度科研費（国際情報発信強化 A）実績報告書を送付した（5 月 10 日）
- 事務局職員 1 名を雇用した（6 月 1 日）
- 生態学琵琶湖賞授賞式（7 月 27 日、滋賀県庁公館）および受賞記念講演（8 月 7 日、オンライン）を行った
- 厚生労働省の地域別最低賃金の改定に伴い、生態学会パートタイム（アルバイト）基準の時給を変更した（10 月 1 日）
- 次々期会長候補および次期代議員選挙の開票を京都大学生態学研究センターにて行った（11 月 5 日）
- 学会賞選考委員に推薦された学会賞・宮地賞・大島

賞・奨励賞（鈴木賞）候補者が理事会メール審議にて承認された（11月23日）

*他、各種集会への後援・共催名義使用承認7件、賞・助成への学会推薦5件

c. 会計報告（2020年3月～2021年2月）

1. 東京化学同人より「生態学入門」印税として229,600円の入金があった（2月25日）
2. ESJ68大会関連委託費として国際文献社に7,432,027円を支払った（4月19日）
3. Wiley社へ2021年英文3誌発行費として797,152円を支払った（5月6日）
4. 国際文献社へ会員管理委託費4～6月3,100,443円を支払った（7月9日）
5. 科研費（国際情報発信力強化）前期分として6,600,000円の入金があった（7月9日）
6. 2021年地区会活動費として7地区会に計1,947,517円を支払った（前年会費収入の6%のうち50%等分配、50%会員比分配）（8月18日）
7. 東京化学同人より生態学入門第2版印税として278,040円の入金があった（8月25日）
8. 創文印刷工業（株）へESJ68 Zoomサポート委託費用として1,694,330円を支払った（9月21日）
9. 土倉事務所へニュースレターNo.54・55編集費として161,700円を支払った（10月6日）
10. 土倉事務所へ日本生態学会誌71-1印刷費として462,660円を支払った（10月6日）
11. 土倉事務所へ日本生態学会誌71-2印刷費として557,700円を支払った（10月6日）
12. 土倉事務所へ保全生態学研究26-1印刷費として1,401,070円を支払った（10月6日）
13. 国際文献社へ会員管理委託費7～9月246,590円を支払った（10月6日）
14. 科研費（国際情報発信力強化）後期分として6,000,000円の入金があった（10月29日）
15. (株)MIERUNEへJeconet移管作業業務費用として514,800円を支払った（11月30日）
16. みずほファクターより2022年会費口座自動引落分として3,360,210円の入金があった（12月13日）
17. 土倉事務所へ日本生態学会誌71-3印刷費として298,320円を支払った（1月12日）
18. 土倉事務所へ保全生態学研究26-2印刷費として1,400,487円を支払った（1月12日）
19. 国際文献社へ会員管理委託費2020年10-12月分として924,177円を支払った（1月13日）
20. 国際文献社へ2021年学会選挙・地区会選挙2件のWeb選挙委託費として459,800円を支払った（1月21日）
21. WileyへEcological Research・Population Ecology冊子代として800,700円を支払った（1月28日）
22. 著作権協会の2021年度複製使用料分配金として152,549円の入金があった（1月31日）
23. 2021年度の会計監査がWeb会議システム（Zoom）で行なわれ、会計は適正に行なわれたことが確認さ

れた。（2月9日）

24. 2021年法人税として180,900円を納税した（2月15日）

2. 大会企画委員会

一般講演・各種集会開催状況

回	開催地	一般講演			ポスター 高校生	集会				合計
		ポスター	口頭	合計		シンポ	フォーラム	企画集会	自由集会	
61	広島	944	214	1158	55	17	7	25	30	79
62	鹿児島	866	166	1032	29	12	11	19	29	71
63	仙台	914	251	1165	40	4	13	24	37	78
64	東京	955	264	1219	52	14	9	17	35	75
65	札幌	899	216	1115	45	19	7	17	29	72
66	神戸	918	269	1187	81	21	12	-	32	65
67	名古屋	928	295	1223	60	31	7	-	29	67
68	岡山	708	224	932	35	17	11	-	20	48
69	福岡	848	235	1083	49	28	9	-	23	60

回	開催地	参加者			
		一般 (有料)	学生 (有料)	その他	合計
61	広島	1278	684	502	2464
62	鹿児島	1104	661	330	2095
63	仙台	1241	686	469	2396
64	東京	1262	828	724	2814
65	札幌	1140	745	421	2306
66	神戸	1187	816	796	2799
67	名古屋	874	734	299	1907
68	岡山	1110	799	803	2712
69	福岡	1093	861	758	2712

- ・フォーラム以外は、昨年より件数が多かったが、過去10年の中では平年並みだった。
- ・シンポジウムは28件中4件が、自由集会は23件中6件がオンライン開催を第一希望としていた。「現地開催を第一希望」あるいは「どちらでも可」とした集会については、すべて現地開催での開催とした。
- ・（昨年のポスター発表が少し盛り上がりづらかったため？）ポスターの希望者が激減。
- ・ポスター賞対象ポスターは例年並みだったが、賞非対象ポスターで減少が多かった。＝口頭発表が人気だった。
- ・日程上の制約のため、口頭発表の受け入れの上限が250件程度だったなか、300件程度の申込みがあった。「口頭発表を希望するが、ポスターでも良い」という選択をしていたすべての講演をポスター発表に変更してもらった。ただし、英語セッションを希望していた講演については、「口頭発表を希望するが、ポスターでも良い」とした場合においても、第一希望に応じた（国際化推進のため）。
- ・参加者数は過去最高級？参加費が高かったことで参加者が減るといった懸念があったが、影響は予想より小さかった。
- ・現地参加希望者は、およそ600人だった。

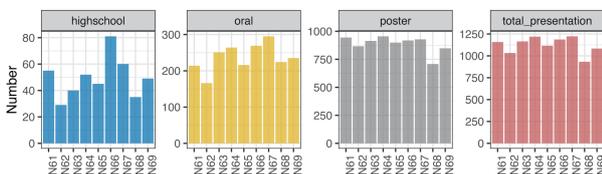
チャレンジしたこと

- ・大会ウェブページを外部サーバーに。CMSでの複数人管理。
- ・Google Driveによるファイルの同時編集プラットフォームの構築
- ・新しい大会プラットフォーム（ONLINE CONF）を採用
- ・集会の提案の注意点として「ダイバーシティー配慮」の文言追加
- ・海外参加者の講演希望時間帯に対応（可能な範囲で）
- ・見逃し配信に対応
- ・バーチャル雑談会場を大々的に設置（会期中15時間以上）。

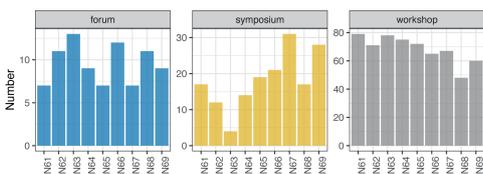
課題

- ・オンラインやハイブリッド化に伴って、これまでになかった仕事が増えた。中でも、これまでの「会場」に当たる大会プラットフォームや懇親会準備の仕事の一部あるいは大部分が企画委員会の負担となる（そのほうが効率的なのでやむを得ない）。実行委員会との仕事の分担を再検討する必要もありそう。そして、新規の仕事は、基本的に企画委員長負担で、その仕事を分担できるのも、運営部会の1~2人で苦しい。
- ・複雑な発表資格&複雑な重複制限&複雑な締切あたりはシンプルにすべきだと感じた。
- ・分野の再整理。私は既存の分野が参加者、発表者として利用しづらい。
- ・オンラインでのポスター発表が今後続いたら、ディスカッサーの導入も検討すべきか。

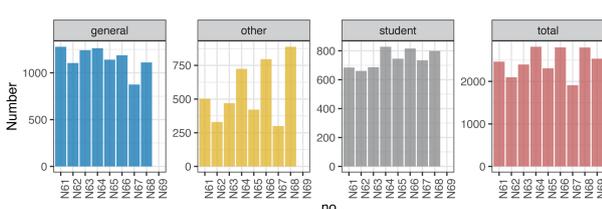
講演数



集会数（フォーラム、シンポジウム、自由集会）



参加者数（一般、有料学生、その他（高校生や無料学生など））



ESJ69は区分ごとには未集計（プラットフォームでの申し込みを集計できていないため）

部会ごとの活動と課題

シンポジウム部会

- ・ERシンポジウムの中止
- ・オンライン化によって海外講演者は増加傾向

ポスター部会

- ・ディスカッサーの配置検討→実施せず。ただし、審査員にその役割を担ってもらう。
- ・分野統廃合の検討

編成部会

- ・例年通り。ただし、手作業での編成するのは難しい数になりつつある。

運営部会

- ・全体のスケジュール管理。開催形態の決定も遅れ、例年通りの進行が難しい。ハイブリッド化に伴い、負担増。

英語セッション部会

- ・概ね例年通り。EPAも再開。英語口頭発表数は増加傾向。

高校生ポスター部会

- ・概ね例年通り。

感じたこと

大会ウェブページ、参加申込、要旨登録、プラットフォーム、各種発表賞審査、編成作業の一元化が必要。今はバラバラで、その間の情報の受け渡しでエラーが生じる。また、そのエラーを減らすために膨大な努力が必要であることは問題。

(文責：高橋佑磨)

3. Ecological Research 刊行協議会

【総会に報告すべき事項】

1. 出版状況（2021年第36巻1~6号の報告）

- ・計1036ページ92報を出版。投稿数267、受理数76（採択率31.0%）。
- ・投稿数267は微増だが長期的には減少（2020年263、2019年307、2018年342、2017年536）。
- ・日本からの投稿数(75)は前年並。採択数は最多(47)。
- ・投稿からFirst Decisionまでは平均38.6日。前年値(38.3)とほぼ同じ（短縮を目指す）。
- ・IF値(2020)は1.917に上昇(2019年1.580、2018年1.546、2017年1.531、2016年1.283)。2020 Journal Citation Reports (Clarivate Analytics)ではEcologyカテゴリーで112/166。
- ・オープンアクセス(OA)論文は15報(16.3%、昨年度は19.1%)（さらに増加が望ましい）。

2. 編集体制

- ・20名の新任（編集委員から編集幹事への委員名の変更を含む）、11名の退任。
- ・新規編集委員、特に海外編集委員を募集中。

3. Ecological Research Award 2021 受賞論文選考

- ・編集委員・幹事の投票により5論文を選考し、理事会の承認を経て決定した

4. 論文の撤回について

Quan Chen, Shuguang Jian, Keming Ma, Pimao Chen

(2018) Differences in macrobenthic faunal communities in mangrove wetland habitats (Zhanjiang, China) invaded and non-invaded by exotic cordgrass *Spartina alterniflora*. *Ecological Research*, 33(6), pp. 1113-1123: <https://doi.org/10.1007/s11284-018-1624-y>. を撤回した。

Chen et al. (2018) *Journal of Coastal Research* 34(3) 534-543. <https://doi.org/10.2112/JCOASTRES-D-16-00223.1> と Table 1, 2, Figure 1 が 2 報で同一で、イントロダクションの一部も一致したため、37 (3) に retraction の記事を掲載する。

5. 特集企画

- ・36 巻 6 号に 1 特集が掲載（東日本大震災後 10 周年の特集号。PE、PSB との 3 誌のバーチャル特集号）。37 巻 1 号に『アジア太平洋地域におけるブルーカーボン研究：現状と将来展望』掲載。この続編が年内に発行予定。このほかに 3 企画が編集集中で、Idea Paper 2nd（全 11 報）が 37 巻 4 号に掲載予定。他 2 特集の計画は延期（大会延期のため）となっている。
- ・今後掲載論文数が不足する可能性が高い。特集の企画立案、論文投稿をお願いしたい。
- ・特集内の 1 報は生態学会負担でのオープンアクセスになる。

6. Author Guidelines の一部変更等

- ・Article type から「特集」のカテゴリを外し、新たに Idea paper のカテゴリを設ける予定。

7. OA 費補助について

- ・生態学会員が corresponding author で ER 誌に論文が受理された場合の、学会からの OA 出版補助が検討されている。

【総会の報告を要しない事項】

- ・生態学会各賞受賞者・これまでのシンポ企画者で、受賞記念論文（総説）、ER シンポジウム論文（総説）が未投稿の皆様には、速やかな投稿をお願いします。（文責：鈴木準一郎）

4. 日本生態学会誌刊行協議会

刊行協議会を 2022 年 3 月 10 日にオンライン開催しました。12 名の編集委員長・幹事・委員が参加し、他の方には資料をお送りし、メールで議論いたしました。刊行協議会では、和文誌の需要見直し、投稿の促進策、投稿システムの運用方法、生態学に関連する他の和文誌との連携、について自由に議論しました。

【報告事項】

発行状況：72 巻 1 号を 2022 年 3 月に発行します。2 つの特集を掲載します。

2022 年から既刊を含めすべての記事が CC BY、著作権は 71 巻（2022 年）以降は著者、それより前は学会となっています。

2021 年から冊子 300 部を発行しています。72 巻（2022 年）から、年 2 号発行（3 月と 9 月）、冊子購読会員は年間 2,000 円、一般販売は 2,500 円/冊となります。

71 巻（2021 年）発行状況

	原著	総説	特集	学術情報	連載	その他	合計	頁数
1 号	1	0	0 (0 編)	1	1	1	4	36
2 号	0	1	1 (5 編)	0	1	0	7	63
3 号	1	0	0 (0 編)	0	1	0	2	27
計	2	1	1 (5 編)	1	3	1	13	126

編集状況（2021 年 2 月）

受付年	段階	一般記事と巻頭言				特集		連載		合計
		原著	総説	情報	コメ	原著	総説	情報	コメ	
2019	審査中	0	0	0	0	0	0	0	0	0
特集 4	却下	2	1	0	0	1	0	0	0	4
連載 3	受理	1	1	4	2	7	7	5	6	33
	合計	3	2	4	2	8	7	5	6	37
2020	審査中	0	0	0	0	0	1	0	1	2
特集 4	却下	1	2	0	0	0	0	0	0	3
連載 3	受理	3	1	1	1	1	2	11	3	27
	合計	4	3	1	1	1	3	11	4	32
2021	審査中	0	1	0	0	0	0	0	0	1
特集 0	却下	6	3	0	0	0	0	0	0	9
連載 3	受理	0	0	0	0	4	5	1	2	12
	合計	6	4	0	0	4	5	1	2	22

2022 年受付はまだありません。投稿原稿数は、2009–2016 年は 33–68 でしたが、2017 年以降は 22–37 です。

次期（2023–2025 年）編集委員会への引き継ぎ

2022 年 3–6 月：今期の委員長が、次期の委員長候補の内諾を得ます。7 月の理事会に、次期委員長候補を報告します。

2022 年 7–12 月：次期委員長候補が次期委員会を組織します。12 月の理事会で次期委員会を提案します。

（文責：永光輝義）

5. 保全生態学研究刊行協議会

日 時：2022 年 3 月 13 日 11:00-12:20.

場 所：zoom オンライン

参加者：小池、丑丸、西廣、横溝、東城、露崎、岸本、角谷、根岸、佐伯、小山、天野、森田、戸田、石濱、今藤、橋口（事務）

1. 刊行状況報告について編集委員長から報告があった。

2. DOAJ への登録をめざした変更

オープンアクセスジャーナルの質保証のため、登録に向けた変更を行うこととなった

- ・剽窃チェックの導入。生態誌と協働で事務局にて行う方向で進める。

- ・ORCID iD を表示する。現在試行中。PDF での表示場所は印刷所と相談。

- ・個々の PDF への CC BY 記号の表示。表示位置は印刷所と相談。

- ・J-Stage が止まったときの外部の長期保存サービス

(Portico) は J-Stage で対応済み。

・その他は対応済み

3. J-Stage の機能強化にともなう J-Stage データ、Jxiv への対応

対応して投稿規定に記載することとした。ただし現状からの実質的な変更はあまりない。

・J-Stage データにより電子付録ファイルに独立の DOI をつけることができる。figshair を利用して J-Stage に特化したもので論文 PDF の公開と同時にデータが公開される。これまでも外部のサーバーに置くことはできた。

・料金 (Data Publishing Charge, DPC) は今のところ J-Stage 持ち (有料化されたら著者持ち)。現在の電子付録 (無料) と併用する。

・Jxiv は初めての日本語プレプリントサーバー。これまでもプレプリント等は利用可能だった。

4. Evidence based conservation の推進と Conservation Evidence との連携

Evidence based conservation を推進するため、バイアスのない根拠の提供に特化した論文区分を置き Conservation Evidence と連携することとする。システムティックレビューを行って保全活動を定める場合などの根拠情報となる。

・新規性よりも根拠となるバイアスの無さを重視するエビデンス論文の区分として、既存の「実践報告」をこれにあてる。

・論文に盛り込むべき情報は Conservation Evidence にもデータベース掲載可能なものとし、保全誌の「実践報告」に掲載された論文が自動的に Conservation Evidence データベースに登録されるようにする。

・これまで「実践報告」に当てられていたがエビデンス論文に該当しないものは、他の論文区分で掲載する。データがあるものは「調査報告」、社会的な取り組みの報告などは「保全情報」など。

・原著論文であってかつエビデンス論文にも該当するものについては今後対応を考える。

5. 投稿規定の改定

上記に対応した投稿規定の改定を行ない 2022 年 4 月から適用する予定。理事会事項のため改訂案を理事会に付議する。

編集状況

1. 2022 年 1 月～3 月

	原著論文	総説	調査報告	実践報告	解説	保全情報	・巻頭言 ・学術提案	計
2022 新規投稿	3	1	2	0	1	1	1	9
受理	0	0	0	0	0	0	0	0
却下・取下げ・話題不適當	0	0	0	0	0	0	0	0
審査中	3	1	2	0	1	1	1	9

2. 2021 年

	原著論文	総説	調査報告	実践報告	解説	保全情報	・巻頭言 ・学術提案	計
2021 新規投稿	14	3	10	5	0	1	2	35
受理	2	2	7	3	0	0	2	16
却下・取下げ・話題不適當	2	0	0	0	0	0	0	2
審査中	10	1	3	2	0	1	0	17

2020 年新規投稿数 45 編：受理 35 編、却下・取り下げ 7 編、審査中 3 編

2019 年新規投稿数 34 編：受理 31 編、却下・取り下げ 3 編、
(文責：小池文人)

6. 自然保護専門委員会

日時：2022 年 1 月 27 日 17:00-21:00 リモート会議 (zoom) にて開催

出席者：露崎・長谷川・黒沢・星崎・亘・奥山・増田・和田・野間・中井・岡・伊谷・高嶋・平田・増沢・加藤・清水・横畑・阿部・常田・水谷・矢原・吉田・村上・神山・大久保・五箇・関島 (28 名)

【審議事項】

- 2021 年度事業の決算について
- 2022 年度事業計画及び予算 (要望書作成・アフターケア活動費用等：120,000 円)
- 委員会内規・覚書等の改訂
- 次期委員の選出・役員の推薦
- 苦厚厚真風力発電事業計画の中止を求める要望書案について
- 自然保護専門委員会ホームページの作成・公開について
- 要望書提出の基準等についての検討

【報告事項】

- 自然保護専門委員会の活動報告 (2021 年度)
 - 沖縄県石垣島「白保のリゾートホテル建設計画に対するサンゴ礁生態系保全を求める要望書」(2019 年 3 月審議) の立案・提出作業の白紙について
 - 「ハチの干潟」での LNG 火力発電所建設計画に対する要望書の共同提出の提案について
 - 「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律の施行状況等を踏まえた今後講ずべき措置について (答申素案)」に対する要望書
 - 「石狩海岸風車事業計画の中止を求める要望書」アフターケア委員会による事後調査結果の公表について
 - 日本生態学会第 69 回大会 (福岡大会) でのフォーラム開催について
- 地区会報告
 - 北海道地区、近畿地区、中国・四国地区の活動報告
- 作業部会・アフターケア委員会報告
 - 濃飛自動車道路建設事業、京都亀岡市アユモドキ問題、辺野古・大浦湾サンゴ礁生態系保全、魚釣島ヤ

- ギ問題の各アフターケア委員会報告
4. その他

(文責：和田直也)

7. 自然保護専門委員会外来種対策作業部会

日時：2022年3月11日 17時-18時 リモート会議にて開催

出席者：橋本・坂本・戸田・池田・片岡・増澤・岩崎・森本・安田・常田・小池・中井・佐藤・岸本・五箇

【審議事項】

1. 外来生物法の改正についての課題
 - ・アメリカザリガニおよびミシシッピアカミミガメの「条件付き」特定外来生物指定による法的規制がかけられるが、従来の特定外来生物指定となり、一般人の誤解や混乱が生じないか懸念。対策の強化も含めて、普及啓発が重要。
 - ・一方でアライグマのように、第一次指定特定外来生物でありながら、対策が滞っている種もあり、防除の長期化が自治体のモチベーションの低下につながっている。法改正で終わらせることなく、実効性を持たせることが重要。
 - ・外来生物法改正を話題としたフォーラムを今大会中に開催。
2. 生態学会外来種対策専門委員会の設立案について
 - ・外来種関連の提言や発信をさらに強化するための独立した委員会の設立を提案(村上)。
 - ・部会員が外来種問題にかかる施策に対して直接関与・貢献している一方、学会として貢献する場が少ないのが現状。
 - ・現状の自然保護委員会の下部組織という位置づけでは、他の自然保護案件が多すぎるため、外来種対策に関する議論が表に出にくい。
 - ・感染症対策も含めた専門委員会を作ってはどうか。→確かに目に見えない外来種という意味で通じる部分はあるが、問題の規模や専門性の観点から、別の組織が必要ではないか。
 - ・案には総論賛成ではあるが、具体的なメンバー構成や、対策地域の網羅など、体制の構築には議論と整理が必要。
 - ・今後、部会メンバー内で、青写真作成に向けて議論を継続。

【報告事項】

1. 各種外来生物対策の実情報告
 - ・ブラックバス、オオバナミズキンバイ、ナガエツルノゲイトウ、アメリカザリガニ、アルゼンチンアリ、ヒアリ、ツマアカスズメバチ、小笠原における外来植物、イエシロアリなどについて防除の現状と課題について報告。
 - ・上記で話題にもなった感染症対策については、現在国立環境研究所がOIEの東アジア・フォーカルポイントに指定され、環境省「野生動物感染症対策研究」事業を開始。外来種に並ぶ、生態系リスクとして研究を強化。

2. 作業部会のMLを国立環境研内で設置。今後の密な情報交換に活用。

(文責：五箇公一)

8. 将来計画専門委員会

開催日時：2022年3月3日(火) 10:00-12:00

場所：オンライン

出席者(敬称略):石井、石川、巖佐、粕谷、北島、黒川、小泉、酒井、佐竹、佐藤、塩尻、鈴木、田中、辻、土居、彦坂、三木、山道

欠席者(敬称略):大串、立木、森長

オブザーバー:大竹、木庭、藤岡、矢原、木庭

【報告事項】

- (1) 低収入国・地域に居住する一般会員に向けた年会費低減措置について
2019年3月神戸大会総会で承認された。以下2つの条件を満たせば、一般会員であっても学生会員と同等の会費となる。①OECDが定める最新のODA受け取りリストにある国・地域に居住する事。②申請時点で当該年度の学会費が納入済である事。ぜひ活用をいただきたいが、会員への十分な周知がなされていないようである(HPでは情報掲載がされている)。年大会参加のために会員となる方も多く、3月は異動の時期でもあるため、年大会開催の時期に合わせて毎年会員MLで本制度を周知してはどうか。多様な国からの大会参加を触発する制度は、アジアのハブとしての生態学会の役割を果たすためにも重要ではないか。
- (2) 若手支援
昨年度に引き続き「今日はモアイにいこう」をフォーラムとして企画し42名のメンターから応募があった。今年度は個別の相談に加え、spatial chatを活用し、複数人のメンターが揃った部屋を用意し会期中に誰でも自由に参加できる体制とした。本企画は今後も継続し、若手が一層活躍できる場をどのように作っていくかについて議論をしていく。
- (3) 生態学関連分野の大型予算と新しい研究費支援制度について
生態学領域の学際化をもとに、今後分野の発展に必要な大型予算を学会としても戦略的に獲得を目指す仕組みについて検討した。また、企業収益をもとにした生態学研究の経済的支援を行うため、生態学会内で新しい制度設計の検討を始めた。
- (4) 国際組織における日本の生態学のプレゼンスについて
DiversitasやFuture Earthなどの国際研究プログラムにおいて、これまでは日本の生態学者はプレゼンスを示してきたが、今年は生態学会福岡大会会期中にFuture Earthの日本サミット(3.18日開催)が企画されるなど、プレゼンスが弱まりつつある。今後、国際組織で活躍できる生態学分野の人材育成が必要ではないか。
(文責：佐竹暁子)

9. 生態学教育専門委員会

1) 審議事項

2022年4月から、委員長は中田兼介氏(京都女子大学)、

副委員長は丑丸敦史氏（神戸大学）が就任する。お認めいただきたい。

2) 活動報告

①高校生対象の日本生態学会ならびに高校生ポスター発表の広報

- ・SSH 生徒研究発表会は3密回避対策で、ブース出展ができなかったため、日本生態学会と高校生ポスターについてのチラシを作成し、チラシコーナーに置いていただいた。
- ・JST のHP 上でも高校生ポスター参加を呼びかけていただいた。

②オンライン合宿（2021.9.13&14）と大会前の打ち合わせ（2021.3.10）

- ・生態学会大会のフォーラムの内容について検討した。3月15日に開催予定である。
- ・「教養の生態学（仮）」の目次を決め、執筆者の候補について意見交換した。
- ・連載「生態学の今と未来」の今後のテーマについて検討した。

③「教養の生態学（仮）」の内容検討

- ・大学の一般教養や生態学の周辺領域の仕事に携わる方、生態学を専門としない理科教員など、生態学を専門としない方たち向けの生態学の教科書の出版を予定している。今年度は目次案を決定し、執筆者の選定を行った。来年度は原稿の執筆を進めていく予定である。

④連載「生態教育の今と未来」

- ・2021年度は1回掲載し、2022年度の内容・執筆者も選定済み、依頼済みである。

（文責 畑田 彩）

10. 生態系管理専門委員会

2022年3月8日 13:00～15:00（zoom 会議）

出席者：西廣、鎌田、西田、伊藤、橋本、大澤、松田、佐々木、山下、高村、高川、吉田、大脇

1) 活動報告

①キャパシティビルディング部会

2021年度に実施したオンラインワークショップについて報告があった。

テーマ：「生態系管理の協働のアプローチを考える～地域での学びが力に変わる～」

開催日：2021年12月18日 13:00-17:00、開催方式：

Zoomによるオンライン開催

参加費：無料

参加者：49名（受講者40名+講師・ファシリテーター9名）

プログラム：

13:00-13:15 開会挨拶および趣旨説明（橋本佳延 生態系管理専門委員会 幹事）

13:15-13:40 グループセッション1（25分）

13:40-14:10 事例紹介【製炭が核となる生態系管理の展開～地域での学びと連携により広がる可能性】プレゼンター：伊藤浩二（岐阜大学）、出演：大野長一郎（大野製炭工場）

14:20-14:50 事例紹介【トキの生息する里山体験を通じた里山の活用と保全の試み】プレゼンター：大脇淳（山梨県富士山科学研究所）、出演：本間勉（トキの里探検隊長）

14:50-15:10 事例地紹介に対する質疑応答

15:10-16:00 グループセッション2

16:00-16:35 グループセッション2の共有

16:35-16:55 グループセッション3

16:55-17:00 閉会挨拶

決算：

旅費：佐渡取材 100,471 円

能登取材 45,885 円

謝金：佐渡取材 20,000 円

能登取材 28,000 円

合計 194,356 円

総括：

- ・参加者の満足度が高く（アンケート結果）、行事は成功だった。
- ・部会内で動画のアーカイブ化を求める提案があった。

②調査・提言部会

- ・以下の提言論文を3月中に投稿する予定であることが報告された。

表題：自然の賢明な活用を目指して～グリーンインフラ・NbSの推進における生態学的視点～

著者名：日本生態学会 生態系管理専門委員会 調査提言部会（会長：西田貴明）

執筆に関わったメンバー（五十音順）

岩崎雄一、大澤隆文、小笠原奨悟、鎌田磨人、佐々木章晴、高川晋一、高村典子、中静透、中村太士、西田貴明、西廣淳、古田尚也、松田裕之、吉田丈人

2) 学会でのフォーラムについて

3月15日のフォーラムでは、委員会の活動について会員に説明するとともに、生態系管理に関する最近の主要な課題を共有し、今後の委員会活動について、参加者を交えて意見交換することとした。フォーラムは「見逃し配信」も実施するため、コメントをウェブツールで受け付けるなど、参加できなかった会員からも広く意見を受け取る工夫をすることとした。

3) 来年度の活動予定について

委員会共通

- ・4月に新体制による会議を開く。また定期的なミーティングを開くことを検討する。

①キャパシティビルディング部会

- ・オンラインイベントを1回実施する（動画作成・事前配信を含む）。
- ・生態系管理に関する動画のアーカイブ化のため、フォーマット（標準的な構成、公開の形式）などを検討する。

②調査・提言部会

- ・提言論文を活かした学会間連携の取組みを進める。新たな活動について検討する。

（文責：西廣淳）

11. 大規模長期生態学専門委員会

日時：2022年2月23日～3月7日

方法：委員間のメール交換とZoomによるミーティング（3月7日）

出席者：石原正恵（京都大学）、伊東明（大阪市大）、内海俊介（北海道大学）、大手信人（京都大学）、黒川紘子（森林総研）、木庭啓介（京都大学）、中村誠宏（北海道大学）、松崎慎一郎（国立環境研）、村岡裕由（岐阜大学）、中野伸一（京都大学）

【総会に報告すべき事項】

各種研究ネットワーク、プロジェクトの活動について

JaLTER（日本長期生態学研究ネットワーク）、DIWPA（DIVERSITAS in the Western Pacific and Asia、GLEON（国際湖沼研究ネットワーク）、GLUE（Global Urban Evolution Project）、APBON（アジア太平洋生物多様性観測ネットワーク）など、国内外のネットワークが研究活動を行っている。

JaLTERの活動について

コロナ禍の影響で、運営に関する諸会議はすべてオンラインで開催され、例年オンサイトで行われているOpen Science Meeting（OSM）と運営委員会がオンラインで開催された（2021年11月25日）。OSMでは、エコプレートプロジェクト、大気中eDNAの新たな応用研究などの情報交換がおこなわれた。

JaLTERデータベースと生態学会における情報インフラの整備にむけて

昨年度の大規模長期専門委員会での議論をもとに、本課題を検討するワーキンググループ（WG）の設置を理事会に提案し、承認された。以降3回、WGの会議を持ち、現在、学会の情報インフラの将来像をJaLTERデータベースの今後についてとともに、問題点の整理と方向性を検討している。次回理事会以降、データベース検討タスクフォースとして課題に当たることになった。大規模長期生態学専門委員会から4人タスクフォースに参加する。

【新年度の活動計画】

- ・JaLTER/ILTER
 - Open Science Meeting（未定）2021年10月中旬
- ・その他、各ネットワーク、プロジェクトの活動についての情報交換を随時行っていく。
- ・生態学会データベース検討タスクフォースを中心に日本の生態学における情報インフラの整備に向けた議論を広げていく。

（文責：大手信人）

12. 野外安全管理専門委員会

日時：2022年3月4日～11日 メールにて実施

参加者：飯島、大館、奥田、鈴木、粕谷、北村、石原

2021年度活動報告

- ・大学関係で起こった野外での事故（2件）についての情報を収集した。
- 研究室関係者による鈴鹿・天狗堂での自然観察ハイクにおける滑落事故

当事者に事故についての聞き取りを行って報告書を作成した。

東京都立大学自転車部死亡事故

- ・コロナ禍における野外実習の実施状況について情報収集を行った。
- 宿泊を伴う実習を中止し、近郊にて日帰りで行ったケースが多かったが、感染対策を徹底して実習を行ったケースも少数あった。
- ・「フィールド調査における安全管理マニュアル」の高校への配布
- 大会企画委員会高校生ポスター部会の協力のもとで、過去に大会でポスター発表をした高校を中心に配布を行った。
- ・69回大会でのフォーラム開催の準備を進めた。

2022年度活動予定

- ・70回大会でのランチョンセミナー（フォーラム）とポスター展示の準備を行う。
- ・フォーラム内容の動画配信の検討を引き続き行う
- フォーラムで扱っている内容を動画化し、インターネット公開に向けて検討と準備を進める
- ・安全マニュアルの改訂を行う。
- 不審者に対する対応マニュアルの作成を行う。
- 英訳について検討と準備を進める。
- ・事故情報の収集と集約
- 野外調査・実習中の事故やヒヤリハット事象の例を引き続き収集し、解析を続ける。
- 該当の事例があれば、野外安全管理委員会に連絡をいただきたい。また、事故の報告書が大学・研究所等で出版された場合は、ご教示ください。
- ・コロナ禍におけるフィールド調査や野外実習の実施状況調査
- 生態学教育専門委員会と連携しながら、フィールド調査や野外実習の実施状況を引き続き調査し、実施した場合の感染対策についての情報を集約する。
- ・和文誌の『フィールド調査における安全管理マニュアル』の配布
- 800部ほどの在庫があるので、高校や研究機関、および会員への配布を引き続き行う。必要な場合は、連絡をお願いします。

（文責：石原道博）

13. キャリア支援専門委員会

オンライン：3月7日開催

【2021年度活動報告】

1. 福岡大会での企画（全オンライン）
 - ・合同フォーラム（U09 3月15日 15:30-17:30, Room G）
 - 「U09 人生の選択の裏側を聞いてみよう3：博士課程とポストドクのための前向きキャリア論」
 - ・キャリア支援相談室
 - ・（一社）Sus-Proの相談員による無料の就職・転職相談窓口（3月14日、15日、16日13:00-18:00、予約制）
 - ・キャリア支援ランチセッション（学会員・学会

OBOGによる就職とキャリア形成に関する話題提供および懇談（3月15日、17日、18日12:00-13:00）

- ・企業等の就職関連情報（大会HPへのリンク掲載）
- ・託児補助運営サポート
今回も実行委員会に委員が入ったことで、スムーズに事が運べた。
- ・CPD認定プログラムの導入（シンポ2件、フォーラム1件）と受講証明書の発行

2. その他

- ・男女共同参画学協会連絡会運営委員会への参加（年4回）
男女共同参画学協会シンポジウムへの参加・報告書作成
- ・女子中高生夏の学校でのポスター掲示、オンライン座談会への参加、講師派遣
- ・各種統計情報の和文誌化
生態学会和文誌の学術情報特集へ以下を投稿、受理（72(2)2022年9月に掲載予定）
①会員データ、②男女共同参画学協会連絡会による大規模アンケート、③大会参加者の属性データ
- ・学会・学術賞等への応募支援
- ・新委員の公募

【来年度の活動計画】

1. 仙台大会での活動（以下は対面開催の場合。企画によりオンライン化も検討）
 - ・キャリア支援フォーラム
 - ・キャリア支援相談室（個別面談、イベント）
 - ・企業パンフレットの配架
 - ・男女共同参画ランチョンフォーラム
 - ・こども生態学講座
 - ・託児室・ファミリー休憩室
 - ・CPD受講証明書の発行
2. その他の活動
 - ・男女共同参画学協会連絡会運営委員会への参加（年4回程度）
 - ・男女共同参画学協会シンポジウムへの参加（年1回）
 - ・女子中高生夏の学校・学会・学術賞等への応募支援（文責：上野裕介）

13. 情報交流支援専門委員会

【総会に報告すべき事項】

- 1) 日本生態学会による Jeconet（新 Jeconet）の状況について
 - ・ESJ68での代議員会及び総会で報告したとおり、Jeconetの管理運営システムを情報交流支援委員会を中心となり開発し、日本生態学会が管理・運営することとなった。
 - ・2021年11月1日：管理方針および会員ガイドラインを日本生態学会会員ならびに旧 Jeconet 会員にあてて公開。
 - ・2021年12月15日：新 Jeconet の会員登録・運用を開始。

・2022年2月28日現在の会員数は2763人、投稿数は約170件。

2) 新年度の計画

- ・情報交流支援委員会での Jeconet 担当者のリクルート（現在の情報交流支援委員会の任期は2023年3月まで）

（文責：村岡裕由）

14. 監査報告

一般社団法人 日本生態学会

監事 齊藤隆・永松大

当法人の2021年度の事業計画、計算書類、これらの附属明細書、そのほか理事の職務執行の監査について、次の通り報告する。

1. 監査の方法及びその内容

2021年度を通じ、各監事が必要な調査を行い、その結果を監事間で協議して監査を実施した。具体的には、すべての理事会に Web 会議システムで出席し、重要な報告書等を随時閲覧した。また、事前に資料を電子媒体で受領した上で、2022年2月11日に学会事務局と Web 会議システムで接続し、関係する会計書類を逐次閲覧した。さらに、必要に応じて、これらの内容について関係する理事に説明を求めた。

2. 監査の結果

- (1) 事業報告書及びその附属明細書は法令および定款に従い当法人の状況を正しく表示している。
- (2) 理事の職務の遂行に関し、不正の行為もしくは定款に違反する重大な事実はない。
- (3) 計算書類とその附属明細書は当法人の財産および損益の状況をすべての重要な点において適正に表示している。

監査報告付帯意見（次年度繰越金について）

一般社団法人 日本生態学会

監事 齊藤隆・永松大

現状認識

単年度会計は、2011年度から2021年度の11年のうち9年度が黒字となっている。事業を続けるために必要な収入を確保できていることは喜ばしいが、単年度黒字の累積によって次年度繰越金が増え続け、2011年度に37,973,598円だった次年度繰越金は2021年度には1億円を超え11年間で約3倍になった。この金額は、2021年度総支出の約68%を占め、事業に関する支出（47,983,120円）を大きく上回った。

次年度繰越金についての理解

次年度繰越金は企業会計の純資産（内部留保）にあたり、公益法人に対しては、「内部留保の水準として、1事業年度における事業費、管理費及び事業に不可欠な固定資産取得費の合計額の30%程度以下、という水準が示されている（総務省「公益法人の設立許可及び指導監督基準の運用指針」）。ただし、この水準については専門家からさまざまな意見が寄せられており、今後、見直される可能性がある。また、日本生態学会

は公益法人ではないため、次年度繰越金についてこの基準を満たすことを求められているわけではない。

次年度繰越金についての要望

日本生態学会は公益法人ではないものの、公益性が高い活動をしているため、次年度繰越金について一定の規律を持つ必要があると考える。このため、以下の3点について要望する。

1. 収入見込み、事業内容から導かれる次年度繰越金に関する考え方や適正な目安を定めること。
2. 上記目安について会員に説明し、理解を得ること。
3. 上記目安を超える次年度繰越金がある場合は執行計画を作成し、会員に説明すること。

以上。

15. 英文3誌今後の出版体制について

(日本生態学会英文誌出版タスクフォースの答申)

日本生態学会、種生物学会、個体群生態学会は2018年より英文誌共同出版事業を開始した。その後、Ecological Research (ER), Population Ecology (PE), Plant Species Biology (PSB) の共同出版体制については順調に運営されているが、2023年の契約更新、科研費申請に向けて、生態学会としての英文誌出版の基本方針策定が必要となっている。本タスクフォース (TF) は、2021年12月14日開催の日本生態学会理事会で設置されたもので、次の3点について分析し、理事会に報告を行うことを目的としている。

- (1) ER, PE, PSB の出版体制
- (2) Open Science に向けた英文誌出版体制の方向性
- (3) (1), (2) を踏まえた上での科研費申請方針

構成メンバーは委員長 久米篤 (業務執行理事：出版担当)、委員 大塚俊之 (業務執行理事：専務理事)、本庄三恵 (業務執行理事：会計担当)、陶山佳久 (前 ER 編集委員長)、鈴木準一郎 (ER 編集委員長)、富松裕 (ER 副編集委員長)、黒川紘子 (将来計画委員会、データベース WG)、楠本聞太郎 (元次世代育成型エディター)、角田智詞 (元次世代育成型エディター)、大原雅 (PSB 編集長)、山内淳 (PE 編集長) から構成され、主にメールを通じて議論を行った。

答申 (1) ER, PE, PSB の出版体制について

現在、日本生態学会、個体群生態学会、種生物学会は、それぞれ英文誌 ER, PE, PSB を Wiley 社と契約して出版している。一方、編集管理については、一括して日本生態学会が行っている。この出版体制を強化し、世界的な Open Science の流れに対応するため、2024年からの出版契約を日本生態学会に一元化する。すなわち、3誌の出版契約上の所有者は日本生態学会となる。一方、編集体制は変更せず、現状通り、各学会が独立して責任を持って管理するものとする。本件の詳細については、現在、3学会で取り交わされている出版覚書の一部を改訂することで対応する。

答申 (2) Open Science に向けた英文誌出版体制の方向性

世界的な OA 誌化の流れの中で、国内でも早目に OA 誌化に向けた転換の意思を示すことは重要である。その一方で、現在の日本国内の研究環境では、学会英文誌を Gold OA 誌化することは出版コストの関係から非現実的である。そこで、段階的に OA 論文の比率を高め、Transformative Journal (転換雑誌) としても対応可能な体制への移行を即すために、学会員の出版論文に対する OA 出版費の補助制度の導入を行う。2023年までに、生態学会会員が責任著者の ER の出版論文については、18万円で OA 出版できるようにする。この場合、OA 出版を選ばない著者は、従来通り無料で出版可能であり、3学会員はいずれも自由に出版論文を閲覧できる。

OA 出版補助費は学会予算に計上し、当面、年額 700～900万円を想定する。PE と PSB 誌については、次期契約後の 2024 年以降、すなわちこれらの雑誌が生態学会からの出版誌となった後での開始を想定する。ただし、先行する ER 誌での出版補助希望数や、科研費の採択状況、Wiley 社との契約内容などを考慮する。

答申 (3) 科研費申請方針

2022年度の科研費申請は、「国際情報発信強化 (A) か (B)」と「オープンアクセス刊行支援」の2つを申請する。科研費が通った場合 (2024年以降) は、ER、PSB、PE の3誌においても、ER と同様の条件で OA 補助を行う。また、オープンアクセス刊行支援に採択された場合は、Wiley 社と OA 出版経費の削減について交渉する (Wiley 社の OA 誌専門部門、Hindawi プラットフォームへの移行も検討する)。

(文責：TF 委員長 出版担当理事 久米 篤)

16. 委員会規則改訂について

地区会、編集委員会、専門委員会等規則について以下のように改訂されたことが報告された (赤字が修正箇所)。

(目的) 第1条 この規則は、本法人が設置する地区会、編集委員会、専門委員会、**特別委員会**について適用する。(委員会) 第3条 本法人の事業を円滑に遂行するため、編集委員会と専門委員会と**特別委員会** (以下、**三者**を総称して「委員会」と呼ぶ) を置く。

2. 委員会の設置及び廃止は、理事会の議決によって行う。
3. 委員会の委員長、幹事は、専門委員会内規に別に定められた場合を除き、理事会の議を経て会長が委嘱する。
4. **編集委員会と専門委員会**の委員長、幹事及び委員の任期は、原則として2年とする。ただし、再任を妨げない。**特別委員会の委員の任期は、委員会の期限とする。**
5. 委員長は、委員会開催後4週間以内に議事録を作成して、会長に提出する。
6. 事務局は、前項議事録を10年間保存しなければならない。

7. 会員は、会長の承認を得て、前項議事録を閲覧することができる。
8. 委員会は、この規則に定められたことのほかは、理事会の承認によって決定された委員会内規に従って運営する。

(専門委員会) 第5条 会長は、本法人の事業を円滑に遂行するため、各種の専門委員会を設置することができる。

2. 専門委員会は、委員長、幹事ならびに委員で構成し、委員長がこれを召集して議長となる。審議結果のうち執行事項については、**総会**の承認または追認を受けるものとする。

(特別委員会) 第6条 会長は、本法人の事業を円滑に遂行するため、2年以内の一定の期限を定めて集中的な議論を行なうための特別委員会（通称タスクフォース）を設置することができる。

2. 特別委員会は、委員長ならびに委員で構成し、委員長がこれを召集して議長となる。審議結果のうち執行事項については、**総会**の承認または追認を受けるものとする。

一般社団法人日本生態学会地区会、編集委員会、専門委員会等 規則全文 https://esj.ne.jp/esj/Rule/Chiku_Committee.html

17. 男女共同参画学協会連絡会幹事学会 TF の設置について

日本生態学会は、2022年11月から、男女共同参画学協会連絡会の幹事学会を担当する。幹事学会は学協会連絡会運営委員会の運営業務に加え、連絡会シンポジウムの企画・運営等様々な業務を行う必要がある。通常の学会運営に加えて、幹事学会の業務を滞りなく行うため下記のTFを立ち上げたことが報告された。

名称：男女共同参画学協会連絡会幹事学会運営 TF

委員長：半場祐子

副委員長：三宅恵子、可知直毅

委員：佐々木雄大、堂園いくみ、満行知花、斎藤裕美、三谷曜子、藤田剛、曾我昌史、久野真純、宇野裕美、本郷峻、池本美都、Firouzeh Javadi、Hubert Cheung

任期：理事会承認日より2023年12月31日

ミッション：幹事学会として男女共同参画学協会連絡会の運営に関わる業務を行う。

報告：理事会に対して報告する

B. 審議事項

第1号議案 役員退任に伴う改選に関する件

以下の役員候補者の改選について満場異議なくこれを可決承認した。

- ・任期満了により退任する役員（任期：2020.3 総会後～2022.3 総会まで）

理事：理事：湯本貴和、宮下直、中川弥智子、久米篤、木村恵、内海俊介、東樹宏和、中野伸一、吉田丈人、西廣淳、近藤倫生、辻和希、鏡味麻衣子、北島薫、宮竹貴久、村岡裕由、和田直也

監事：齊藤隆

- ・理事会推薦役員候補者（任期：2022.3 総会後～2024.3 総会まで）

理事：宮下直（再任）、北島薫（再任）、久米篤（再任）、木村恵（再任）、村岡裕由（再任）、吉田丈人（再任）、近藤倫生（再任）、辻和希（再任）、鏡味麻衣子（再任）、佐竹暁子、日浦勉、酒井章子、工藤岳、小泉逸郎、鈴木牧、中野伸一（再任）、和田直也（再任）

監事：瀧本岳

- (参考) 上記以外の任期中の役員（任期：2021.3 総会後～2023.3 総会まで）

理事：大塚俊之(専務理事)、佐々木雄大(庶務担当)、本庄三恵(会計担当)

監事：永松大

- ・正会員の投票による理事兼代表理事・会長候補者：宮下直

<特別会計>
賞準備金

収入の部			支出の部		
	21 予算	21 決算		21 予算	21 決算
前年度繰越金	11,124,058	11,124,058	賞金		
預金利息	0	92	宮地賞	400,000	400,000
			大島賞	100,000	100,000
			鈴木賞	200,000	200,000
			小計	700,000	700,000
			雑費	3,850	0
			次年度繰越金	10,420,208	10,424,150
合計	11,124,058	11,124,150	合計	11,124,058	11,124,150

貸借対照表

2021年12月31日現在

一般社団法人 日本生態学会

(単位：円)

科 目	金 額	科 目	金 額
(資 産 の 部)	円	(負 債 の 部)	円
流 動 資 産		流 動 負 債	
現金及び預金	138,068,056	未払金	3,491,942
前渡金	100,000	未払法人税等	180,900
前払費用	972,417	前受金	30,399,100
未収収益	171,049	預り金	385,065
固 定 資 産		固 定 負 債	
特定資産 学会賞準備金資産	10,424,150	退職給付引当金	4,018,000
		負債合計	38,475,007
		(正 味 財 産 の 部)	
		一般正味財産	100,836,515
		指定正味財産(うち 特定資産への充当額)	10,424,150
		正味財産合計	111,260,665
資産合計	149,735,672	負債・純資産合計	149,735,672

第3号議案 2022年度予算承認に関する件

次期（自2022年1月1日至同年12月31日）における予算案について満場異議なくこれを承認可決した。

<一般会計>

収 入			支 出		
費 目	21 決算	22 予算	費 目	21 決算	22 予算
年会費			会誌発行費		
正会員（一般）	25,733,300	25,000,000	ER・PE・PSB	1,597,852	1,500,000
正会員（学生）	4,824,900	4,800,000	生態誌	1,317,680	1,500,000
賛助会員	1,464,000	1,400,000	保全誌	2,781,057	2,800,000
小計	32,022,200	31,200,000	会誌発送費用	365,749	400,000
科研費（国際情報発信強化A）	12,600,000	12,600,000	ニュースレター	231,000	300,000
学会誌売上げ	762,100	500,000	英文校閲・翻訳	17,947	300,000
出版印税	573,786	500,000	英文誌 Open Access 経費	3,738,588	5,000,000
論文掲載料	1,494,300	1,400,000	和文誌編集費	535,942	550,000
広告代	80,000	0	小計	10,585,815	12,350,000
著作権使用料	165,749	150,000	会議費	45,370	150,000
大会収入	11,164,500	20,000,000	旅費・交通費	433,422	1,000,000
講習会費	0	0	人件費	16,058,571	16,500,000
寄附金	0	0	地区会活動費	1,285,470	2,000,000
その他	5,008	2,000	大会支出	9,726,070	20,000,000
前年度繰越金	89,951,992	100,836,515	個体群生態学会出版企画費	340,690	350,000
			INTECOL 会費	0	2,250,000
			事務費		
			通信費	256,135	300,000
			消耗品費	330,812	400,000
			雑費	220,799	350,000
			決済代行手数料	810,182	2,000,000
			サーバ関連費	765,985	300,000
			事務所維持費	1,680,000	1,680,000
			小計	4,063,913	5,030,000
			各種委員会費	291,553	1,500,000
			広報費	0	100,000
			選挙費	221,454	0
			EAFES 費用	0	0
			講習会費	194,356	200,000
			会員管理委託費	4,555,536	4,600,000
			法人税	180,900	300,000
			次年度繰越金	100,836,515	100,858,515
合計	148,819,635	167,188,515	合計	148,819,635	167,188,515
単年度収入	58,867,643	66,352,000	単年度支出	47,983,120	66,330,000
			単年度収入 - 支出	10,884,523	22,000

<特別会計>
学会賞準備金

収入の部			支出の部		
	21 決算	22 予算		21 決算	22 予算
前年度繰越金	11,124,058	10,424,150	賞金		
預金利息	92	0	宮地賞	400,000	200,000
			大島賞	100,000	200,000
			鈴木賞	200,000	200,000
			小計	700,000	600,000
			雑費	0	0
			次年度繰越金	10,424,150	9,824,150
合計	11,124,150	10,424,150	合計	11,124,150	10,424,150

第4号議案 第72回大会（2025年）担当地区会に関する件

第72回大会（2025年）担当地区会候補北海道地区の提案があり満場異議なく承認可決した。

第5号議案 「苫東厚真風力発電事業計画の事業区域の変更を求める要望書」に関する件

以下の「苫東厚真風力発電事業計画の事業区域の変更を求める要望書」を生態学会名にてDaigas ガスアンドパワーソリューション株式会社、北海道知事、環境大臣、経済産業大臣あてに提出する提案があり満場異議なく承認可決した。

苫東厚真風力発電事業計画の事業区域の変更を求める要望書

一般社団法人日本生態学会
会長 湯本貴和

当事業が計画されている苫小牧市東部から厚真町・むかわ町にまたがる勇払原野は、湿原・草原が大規模に現存する希少地域である。風力発電所の建設とその後の運用による環境変化はこの地域の生態系や生物多様性に多大な影響を及ぼす可能性があり、現行の事業計画では、その影響を回避あるいは低減することが下記の理由により極めて困難である可能性が高い。したがって、本事業による環境変化が生態系や生物多様性に与える影響を回避・低減できるに足る科学的根拠が示されない場合は、苫東厚真地域における風車の建設計画を大幅に見直し、事業区域の変更を要望する。

1. **保全の必要性**：計画用地には自然度の高い湿原、草原、湖沼等がまとまって存在している。計画用地とその周辺は大部分が海浜を含めた湿原・草原に占められ、面積は460haに上る（文献から計算）。この面積は、環境省「生物多様性の観点から重要度の高い湿地」にも選定されている安平川湿原に匹敵する。計画用地に含まれる浜厚真海岸は、「北海道自然環境保全指針」において「身近な自然地域」に選定され、各種公共事業や開発等の計画や実施の際に保全に適切に配慮することが求められている。計画用地周辺

には、ラムサール条約登録湿地であるウトナイ湖が存在し、さらに、ウトナイ湖・弁天沼を含む西側と入鹿別川から鶴川流域に至る東側の二区域が、日本野鳥の会・バードライフインターナショナルによる重要野鳥生息地（IBA）およびコンサベーションインターナショナルによる生物多様性の保全の鍵になる重要な地域（KBA）に選定されている。計画用地は、隣接するIBA/KBA選定地域最大の湿地であり、動植物の重要な生息生育地となっている。

2. **希少種**：計画用地は勇払原野の中でも有数の希少種・絶滅危惧種の生息生育地である。鳥類では文化財保護法指定種（天然記念物・特別天然記念物）に5種、国内希少野生動植物種指定種に9種、環境省レッドリスト（以降、環RL）に41種、北海道レッドリスト（道RL）に46種確認されている。魚類では環RLおよび道RLにそれぞれ3種、節足動物では環RLに種18種、道RLに種7種が、維管束植物では環RLに9種、道RLに5種が確認されている。計画用地にはこれらの動植物種が広く生息生育し、本建設計画で環境保全措置を実施しても、風車建設が希少動植物に与える影響を回避または低減することが困難である。

3. **鳥類への影響**：チュウヒ（環RL絶滅危惧IB類・国内希少野生動植物）は、2012～15年には、計画用地内西部、中央部、海岸部、その近傍の複数の湿原で年平均6.8つがい（範囲6～8）が繁殖し、年平均5.3羽（2～9）の雛が巣立っている（文献から計算）。計画用地内で繁殖するチュウヒつがい数は、国内繁殖つがい数の5%を占め、繁殖成績も屈指の高さを誇り、計画用地は本種の最重要繁殖地である。チュウヒは、巣の周囲2km以内において、採食地面積が減る、又は人工構造物面積が増えると、営巣放棄および繁殖失敗確率が高くなることが知られているが、計画用地内においてチュウヒの巣から2km以上の距離を取り風車を建設することは、巣の密度が高いため不可能である。

タンチョウ（環RL絶滅危惧II類・国内希少野生動植物種・特別天然記念物）の渡来が海岸部の湿原に相次ぎ、2017年と2021年に繁殖が確認された。タンチョウは、環境省により道央圏への生息地の分

散が推し進められている。ツル科鳥類は、風車建設により、生息地放棄の要因となる障壁効果の影響を受けやすい。風車への衝突リスクもある。これらのことは、タンチョウ生息地分散計画の目標にも反する。さらに、激減している日本固有亜種アカモズ（環RL絶滅危惧IB類）の繁殖地も計画用地内にあり、オオジシギ（環RL準絶滅危惧種）も多数繁殖している。

計画用地とIBA/KBAとの最短距離は2 km未満であり、計画地周囲にあるIBA/KBAにまで影響が波及する危険性が高い。大型鳥類等の行動圏は半径2 kmより優に大きく、計画用地とIBA/KBAの双方を利用する動物は少なくない。例えば、計画用地は、IBA/KBA内で繁殖するチュウヒの採食地である。IBA/KBAを往来する最大1万5千羽のガン類の飛翔ルートでもある。計画用地への風車建設は、鳥類の行動変化やバードストライク等を通じ、これら動物の個体数減少を引き起こし、計画用地だけでなくIBA/KBAを含めた周辺の生態系機能を劣化させる可能性が高い。

4. **生態系の重要性:**植物については、ナガバエビモ（環RL絶滅危惧IA類・国内希少野生動植物種）をはじめとする、海浜や池塘等の特殊な生育地に現れる水草の絶滅危惧種が確認されている。計画用地は、各地ではほぼ消失した海浜草原・湿原が自然状態に近い状態で現存する希少地域である。絶滅危惧種の絶滅回避や影響低減という観点だけでなく、海浜草原・湿原が有する景観を良好な状態で持続するためにも、計画地全域の保全が必要である。加えて、風車建設は基礎部よりも作業道路やヤードが大きな面積を占め、これらの造成地では建設後に外来植物が繁茂する事例もみられる。本事業計画は、事業区域内の生態系や景観に影響を与え、それらの機能を大きく低下させる可能性が高い。

本建設計画が実施されれば、計画用地内外の貴重な生態系に大きな影響が及び、生物多様性が著しく低下することが、研究成果や科学的知見の集積から予見される。本建設計画用地内において、風車の位置や台数を大幅に見直したとしても、風車建設やその後の運用に伴う環境変化が生態系や生物多様性に及ぼす影響を回避あるいは低減するには限界があり、本風力発電事業と環境保全の両立は困難である。本事業配慮書に対する北海道知事意見では、「重大な環境影響を回避又は十分低減できない場合若しくは回避又は低減できることを裏付ける科学的根拠を示すことができない場合は、事業区域の変更、規模の縮小など事業計画の見直しを行うことにより、確実に環境影響を回避又は低減すること。」と述べられており、これまでに類のない強い懸念が示されている。

地球温暖化対策として再生可能エネルギー導入が進められている一方で、本事業は導入にあたり生態系や生物多様性に十分に配慮した立地選定が行われているとはいえない。生物多様性保全は地球温暖化対策の根幹の一つであり、地球温暖化対策の効果を最大化するには、生

物多様性の価値が高い場所を避け再生可能エネルギーを導入することが望ましい。本建設計画用地のように、生物多様性上の価値が高く、開発による生態系への影響を回避または低減することが明らかに困難である場合には、計画は見送られるべきである。以上より、本事業による環境変化が生態系や生物多様性に与える影響を回避・低減できる科学的根拠が示されない場合は、日本生態学会は、本建設計画の事業区域の変更を強く要望する。以上

II. 第69回日本生態学会大会の記録

第69回日本生態学会大会はオンラインにて2022年3月14日～3月19日に開催されました。

大会期間中に公開講演会、シンポジウム28、自由集会23、フォーラム9、一般講演（口頭発表）235、一般講演（ポスター発表）848、高校生ポスター49、ジュニア生態学講座が行われました。参加者は2712名でした。6日間の日程とポスター賞・高校生ポスター賞・英語口頭発表賞受賞者は以下の通りです。

日程

- 3月14日 開会挨拶、代議員会、受賞記念講演、一般講演（口頭発表・ポスター発表）、フォーラム、高校生ポスター
- 3月15日 受賞記念講演、一般講演（口頭発表・ポスター発表）、フォーラム、高校生ポスター、授賞式、懇親会
- 3月16日 総会
- 3月17日 シンポジウム、自由集会、一般講演（ポスター発表）、高校生ポスター
- 3月18日 シンポジウム、自由集会、一般講演（ポスター発表）、高校生ポスター
- 3月19日 シンポジウム、自由集会、一般講演（ポスター発表）、高校生ポスター、みんなのジュニア生態学講座

ポスター受賞者

<動物個体群 / Animal population >

【最優秀賞】

「広緯度で比較した降海型アメマスの回遊パターンの多様性と成長」* 後藤暁彦（東京大学）、黒木真理（東京大学）、白井厚太郎（東京大学）、森田健太郎（北海道大学）

「クロサンショウウオの卵囊における透明から乳白色への進化は捕食圧によって生じたか?」* 安田晶南、森井椋太、池田紘士（弘前大学）

【優秀賞】

「摂食経験に応じて変化するタンガニイカ湖産鱗食魚の捕食行動と下顎骨形態」* 丸林菜々子（富山大学）、八杉公基（宇都宮大学）、小田洋一（名古屋大学）、竹内勇一（富山大学）

<動物群集 / Animal community >

【最優秀賞】

「高山性鳥類の餌資源に占める山麓から輸送される資源

の重要性」* 飯島大智 (千葉大・院・融), 村上正志 (千葉大・院・理)

【優秀賞】

「カミツキガメがザリガニを介して水草に与える間接効果は流速に依存して変化するのかわか?」* 西本誠 (東京大学), 宮下直 (東京大学), 今津健志 (元千葉県生物多様性 C), 高橋洋生 (自然環境研究センター), 深澤圭太 (国立環境研究所)

「Sexual cannibalism に対抗するオスの適応が近縁種を駆逐する!？」* 橋啓輔, 高倉耕一 (滋賀県立大学)

<行動 / Behavior >

【最優秀賞】

「地上棲の毒ヘビであるニホンマムシとヒメハブにおける捕食行動の比較」* 浜中京介, 森哲 (京都大学)

【優秀賞】

「モモジロコウモリの餌場利用とコミュニケーション音声の関係」* 松岡佳奈 (同志社大学), 藤井紀帆 (同志社大学), 藤岡慧明 (同志社大学), 福井大 (東京大学), 飛龍志津子 (同志社大学)

「内温性魚類はなぜ速い? 尾びれ振動頻度とストライド長の種間比較」* 徳永壮真 (総合研究大学院大学), Nicholas PAYNE (Trinity College Dublin), 河邊玲 (長大海七), 中村乙水 (長大海七), 古川誠志郎 (水研機構・水産資源研), 渡辺佑基 (総合研究大学院大学, 国立極地研究所)

「ブラウントラウトの行動睡眠」* 古澤千春, 小泉逸郎 (北海道大学)

「アリ科の繭に対する衛生行動」* 島本侑奈 (甲南大学), 桂衣里奈 (甲南大学), 奈良崎泉 (大阪大学), 藤岡桃加 (甲南大学), 後藤彩子 (甲南大学)

「エビハゼ相利共生の繋がり強さは環境中の餌量が関係する? 4 種間の行動の比較から」* 北口あやの (大阪市立大学), 山田泰智 (大阪市立大学), 伊藤岳 (大阪市立大学), 横田克巳 (東京大学), 邊見由美 (京都大学), 幸田正典 (大阪市立大学), 安房田智司 (大阪市立大学)

<動物繁殖・生活史 / Animal reproduction and Life history of animals >

【最優秀賞】

「ミナミメダカにおける「有限な精子」をめぐる雌雄の戦略」* 近藤湧生, 幸田正典, 安房田智司 (大阪市立大学)

【優秀賞】

「オカミミガイ科腹足類における初期発生様式の進化と陸上進出史の解明」* 井上香鈴, 矢萩拓也, 狩野泰則 (東京大学)

<動物と植物の相互関係 / Animal-plant interaction >

【最優秀賞】

「コケ上で多様化したダニの発見—コケの吸汁に関わる行動および口器形態の種間比較」* 池田颯希, 今田弓女 (愛媛大学)

【優秀賞】

「森林再生場に影響を与えるシカ食害と植物種多様性: 環境 DNA によって評価する」* 仲野友太 (北海道大学), 南雲優哉 (北海道大学), 米谷衣代 (近畿大学), 内海

俊介 (北海道大学 FSC)

<植物個体群・群落 / Plant population and Plant community >

【優秀賞】

「ブナの葉フェノロジーにおける季節適応: 気候の標高・地形間変異に対する局所適応」* 杉本咲 (岩手大学大学院), 石田清 (弘前大学)

「石灰岩地質に成立する山地二次林の植生組成と土壌栄養塩利用の特徴」* 芝里万杜, 澤田佳美, 青柳亮太, 北山兼弘 (京大・農・森林生態)

「湿原植物群集におけるバイオマス生産の時間的安定性の決定要因」* 石井直浩 (横浜国立大学), 巻島大智 (横浜国立大学), 須藤瑠衣 (横浜国立大学), 谷口快海 (東北大学), 後藤亮仁 (横浜国立大学), 河井勇高 (東北大学), 彦坂幸毅 (東北大学), 陶山佳久 (東北大学), 佐々木雄大 (横浜国立大学)

<植物繁殖・生活史 / Plant reproduction and Life history of plants >

【最優秀賞】

「雌雄異株植物コウライテンナンショウの雄株から雌株への送粉順序に及ぼすおいの効果」* 芳崎優華 (北大・院・環境科学), 牧野海斗 (北大・理学部), 塩尻かおり (龍大・農), 高橋空 (北大・院・環境科学), 大原雅 (北大・院・環境科学)

【優秀賞】

「湿潤な沢と乾燥した尾根間の相互移植実験によって明らかになったキツリフネの局所適応」* 近藤輝留, 江川信, 塩見温土, 山本哲也, 田路翼, 中瀬悠太, 市野隆雄 (信州大学)

<植物生理生態 / Plant ecophysiology >

【優秀賞】

「How do wood traits account for the diversity of trunk methane production and emission in a temperate forest tree community?」* Takumi MOCHIDOME, Ayaka SAKABE, Masako DANNOURA, Daniel EPRON (Kyoto University)

「多雪地広葉樹は展葉をどう調節しているか? 融雪に伴う地温上昇と道管形成の関係」* 庄司森, 吉村謙一 (山形大学)

「簡易的な双子葉類の葉脈構造および種依存的なグラフ特徴量の抽出」* 岩政公平 (九州大学)

<景観・遷移・更新 / Landscape ecology, Succession and regeneration >

【最優秀賞】

「景観の違いが哺乳類の農地利用に与える影響」* 相川詠紀, 斎藤昌幸 (山形大学)

「時系列データに基づくササ掻き起こし施業の生態系機能評価: 森林生態系管理の指針」* 竹内理絵 (横浜国立大学), 西澤啓太 (横浜国立大学), 小林勇太 (横浜国立大学), 増本翔太 (横浜国立大学), 鈴木紅葉 (横浜国立大学), 河上智也 (北海道大学), 片山昇 (小樽商科大学), 小林真 (北海道大学), 岡田慶一 (東京農業大学), 辰巳晋一 (森林総合研究所), 高木健太郎 (北海道大学), 森章 (横浜国立大学)

【優秀賞】

「積雪環境におけるアカギツネとニホンテンの食性：農村景観と森林景観の比較」* 中根あすみ（山形大学）、榎本孝晃（岩手大学大学院，山形大学），斎藤昌幸（山形大学）

<物質循環 / Material cycling >

【最優秀賞】

「暖温帯二次林における菌根菌糸生産の季節変化：異なる菌根菌タイプの樹種間比較」* 寺井水萌（東京農業大学），小南裕志（森林総合研究所），今井伸夫（東京農業大学）

【優秀賞】

「冷温帯コナラ林における非切断細根呼吸の日変化パターン」* 今吉健斗，塩手文也，吉竹晋平（早稲田大学）

<生物多様性 / Biodiversity >

【最優秀賞】

「寄生者ワサフクロムシの性決定機構の解明」* 梶本麻未（奈良女子大学），柳町隆造（ハワイ大学），遊佐陽一（奈良女子大学）

【優秀賞】

「汎濫原性淡水魚イタセンパラの分布域形成：全ゲノムデータに基づく集団解析」* 大貫溪介（京大院理），伊藤僚祐（京大院理），三品達平（理研 BDR），橋口康之（大阪医科薬科大），池谷幸樹（アクア・トトぎふ），上原一彦（大阪環農水研・多様性），西尾正輝（氷見市教委），田畑諒一（琵琶博），森誠一（岐阜協立大），渡辺勝敏（京大院理）

<進化・数理 / Evolution and Mathematical ecology >

【最優秀賞】

「モデルなきミミックはなぜ生じるか？：捕食者の生得的忌避と移動分散の影響」* 加藤颯人，瀧本岳（東京大学）

【優秀賞】

「毒源が変われば形態も変わる？—食性の異なるヤマカガシ属における頭部形態の変化」* 福田将矢（京都大学），Jing-Song SHI（Shenyang Norm. Univ.），Alan H. SAVITZKY（Utah State Univ.），Qin CHEN（Chengdu Inst. Biol.），森哲（京都大学）

「ハンドウイルカ属における母乳中の呈味物質とその受容能力に関する遺伝学研究」* 勝島日向子（北海道大学），柏木伸幸（かごしま水族館），濱野剛久（かごしま水族館），小木万布（御蔵島観光協会），早川卓志（北海道大学）

「深層学習の特徴抽出過程を利用したチョウ翅模様の形質間距離の解析」* 網野海（東京大学），平川翼（中部大学），矢後勝也（東京大学），松尾隆嗣（東京大学）

「シユンラン属における菌従属性の進化の遺伝的背景をゲノム比較により明らかにする」* 茶木慧太，村上正志（千葉大・院・理）

「ヤノクチナガオオアブラムシの口吻長の個体差が共生アリによる被捕食率におよぼす影響」* 中村駿介，山本哲也，松浦匠，田路翼，中瀬悠太，市野隆雄（信州大学）

<外来種 / Introduced species >

【最優秀賞】

「ヒトの歴史と遺伝子から紐解くニホンヤモリの系統地理」* 千葉稔，平野尚浩，山崎大志，YE Bin，伊藤舜，香川理，遠藤鴻明，西田柊，原聖司，千葉聡（東北大学）

【優秀賞】

「外来生物の形質を議論するときは原産地域を考慮しないと意味がない：開花時期を例に」* 丸山紀子，河鱈実之，深野祐也（東京大学）

<保全 / Conservation >

【最優秀賞】

「土地利用景観および営巣木スケールにおけるチゴモズの繁殖場所選択」* 立石幸輝（新潟大学・院・自然），高岡奏多（新潟薬科大学・薬），富田健斗（新潟大学・院・自然），鎌田泰斗（新潟大学・農），関島恒夫（新潟大学・農）

「東京大都市圏において史跡玉川上水が受け継ぐ植物多様性」* 唐木田耕大（東京大学），森健人（東京大学），岩知道優樹（横浜国立大学），大黒俊哉（東京大学），内田圭（東京大学）

【優秀賞】

「魚類生息場としての砂利採掘跡湖沼の機能：種数、個体数、種組成に着目して」* 中橋穂乃香（北海道大学）

「森林スポーツ大会が自然環境に与える影響の評価」* 小牧弘季，佐伯いく代，津村義彦（筑波大学）

<生態系管理・生態学教育・普及 / Ecosystem management, Education and popularization of ecology >

【最優秀賞】

「畦畔植生はいかにソバの送粉サービスを高めるか：物理構造 vs 花資源」* 永野裕大（東大・農），横井智之（筑波大・環境），宮下直（東大・農）

【優秀賞】

「ヤクシカ糞中の植物 DNA 分析：高木由来の餌を主食し副食効果で林床植物を減らす」* 東悠斗（九州大学），廣田峻（東北大学），陶山佳久（東北大学），矢原徹一（QOU）

高校生ポスター賞受賞者

【最優秀賞】

「ツバメの巣の接着強度は何によって決まるのか」* 中泉快莉，小林彩葉，日村咲百合（京都府立亀岡高等学校）

「都市公園の低木が植物の多様性を維持している？」* 田代逞真，伊藤颯真，小坪慎太郎，石嶋健吾，鈴木悠人（海城中学高等学校）

「クロマルハナバチの死体排除行動と死体認知のしくみ」* 河野洋，渡邊あかり（安田学園高等学校）

【優秀賞】

「行動実験で明らかにするオオサンショウウオの在来種と交雑種の個体間相互作用」* 池田萌朱那（三重県立松阪高等学校）

「プラナリアの自切条件の特定」* 北村颯太（大阪府立岸和田高校）

「タンポポの種子の特徴からみた在来種と外来種の繁殖

戦略の違い」* 宮田愛彩, 示野安那, 南優太, 宮元凜 (石川県立七尾高等学校)

「マツカサガいの緊急避難生息域外保全技術の開発」* 中村柑南, 渡壁咲希, 高尾実里, 山本真慈 (愛媛大学附属高等学校)

「ミルワームによるプラスチック分解」* 工藤菜央, 工藤愛夏, 佐藤遙花, 柴崎和呼, 村上由花 (大分舞鶴高等学校)

【審査員特別賞】

「高崎山ニホンザル群におけるグルーミング行動の雌雄比較Ⅱ」* 工藤愛夏, 岩永航, 岩屋円, 大津華奈, 高野凌 (大分舞鶴高等学校)

「里山のイノシシはいつ・どこで・何をしている?」* 鈴木伊織, 持留幸太, 千田和也, 古川智菜, 松本成雅, 川島綾華, 高田誠真, 横田真一, 出沢良樹, 伊藤信一 (浜松学芸高等学校)

「水生菌類培養の最適培地を探る」* 赤井陽央, 池尻眺晟, 福嶋優太 (米子東高等学校)

「バイオチャー散布がダイコンの成長と収量に及ぼす影響」* 中村宥継, 鹿住祐世, 松本悠花, 松浦萌生, 南部夏歩, 棚澤由実菜 (東農大三高等学校)

「ヒゴスミレの個体数を増やすコツ」* 須佐多緒, 古泉菜々海 (新潟県立新津高等学校)

「サバの消化管から見つかる海洋ゴミについての化学的分析」* 柴藤一樹 (法政大学第二高等学校)

「ミツバチの記憶・学習能力の発達に関わるコミュニケーションの探索」* 高子越 (安田学園高等学校)

「魚類相の変遷とその要因についての一考察」* Shohei UMEGAWA, Kyoka MATSUO (Tondabayashi High School)

「大阪府で繁殖を確認したイワナ *Salvelinus leucomaenis* の生活史について」* Kaito OANA, Kanato NAKAMURA (Tondabayashi High School)

「大阪府内の河川で採集されたウグイの正体」* 中島歩 (開智高等学校)

英語口頭発表賞 (Best English Presentation Award) 受賞者

< Plant community >

"Effects of environment and conspecific density on seedling mortality of a Bornean tropical rainforest: are the effects phylogenetically conserved?" Prapawadee NUTIPRAPUN (Osaka City University), Akira ITOH (Osaka City University), Satoshi NANAMI (Osaka City University), Seiya OKUNO (Osaka City University), Shuhei MATSUYAMA (Rakuno Gakuen University), Koichi KAMIYA (Ehime University), Sylvester TAN (ForestGEO), Mohizah MOHAMAD (Sarawak Forest Department)

< Behavior >

"A new benefit of flocking? Responses by tree sparrows to other species' alarm calls" 惣田 彩可 (京都大学), 鈴木俊貴 (京都大学白眉センター)

< Plant ecophysiology >

"Relationships between leaf phosphorus fractions and leaf

functional traits among 12 Australian woody species" Yuki TSUJII (Kyushu University/Macquarie University), Baoli FAN (Northwest Normal University), Zhangying LEI (Macquarie University/Shihezi University), Ian WRIGHT (Western Sydney University/Macquarie)

< Life history of plants >

"Determinants of leaf longevity of *Arabidopsis halleri* under the seasonal environmental fluctuations." Genki YUMOTO (Kyoto Univ. CER), Haruki NISHIO (Shiga Univ./Kyoto Univ. CER), Tomoaki MURANAKA (Kagashima Univ./Kyoto Univ. CER), Sugisaka JIRO (Kyoto Univ. CER), Mie N HONJO (Kyoto Univ. CER), Hiroshi KUDOH (Kyoto Univ. CER)

< Evolution >

"Gene flow and chromosome evolution in sticklebacks" Yo YAMASAKI (National Institute of Genetics), Atsushi TOYODA (National Institute of Genetics), Tomoyuki KOKITA (Kyushu University), Seiichi MORI (Gifu Kyoritsu University), Jun KITANO (National Institute of Genetics)

< Animal-plant interaction >

"Does particle size reduction important for eating fruits: Examining the effects of food particle size on *in vitro* digestion." Tianmeng HE (Kyoto Univ.), LEE Wanyi (Kyoto Univ.), HANYA Goro (Kyoto Univ.)

< Material cycling >

"A new assessment of amino acid stable carbon isotope compositions in marine organisms: implications for food web studies" Yuchen SUN (Univ. Tokyo/JAMSTEC), Naoto F. ISHIKAWA (JAMSTEC), Nanako O. OGAWA (JAMSTEC), Yoshinori TAKANO (JAMSTEC), Naohiko OHKOUCHE (JAMSTEC)

< Animal population >

"Spawning season, male guarding behavior and egg predation of invasive smallmouth bass (*Micropterus dolomieu*) in Lake Nojiri, Japan" Miles Isao PETERSON (Shinshu University), Satoshi KITANO (Nagano Environ. Con. RI)

"Do impacts and infection levels of parasite change across seasons? A test in stream salmonid and parasitic copepod system" Ryota HASEGAWA (Hokkaido Univ.), Itsuro KOIZUMI (Hokkaido Univ.)

< Fungi and microbes >

"Functions of compound produced by the endophyte, *Pezizula ericae*, infecting *Aucuba japonica* roots" 土山 紘平 (筑波大学・生命環境), 山路 恵子 (筑波大学・生命環境), 春間 俊克 (Hokkaido Univ./筑波大学・生命環境)

< Mathematical ecology >

"Valley of free-riders on the evolution from horizontally to vertically transmitted mutualism" Yu UCHIUMI (Nihon Univ.)

< Ecosystem management >

"Time, spaces, and parents: What determines frequency of children's play in nature?" Van Mai TRUONG (Hiroshima University), Miyabi NAKABAYASHI (Hiroshima

University), Tetsuro HOSAKA (Hiroshima University)

< Conservation >

"Habituation or sensitization? Long-term responses of yellow-bellied marmots to human disturbance." Kenta UCHIDA (UCLA/JSPS), Daniel T BLUMSTEIN (UCLA)

< Biodiversity >

"Land use shapes ecological resilience to typhoons" Samuel Robert peter-james ROSS (Trinity College Dublin/OIST), Nicholas R FRIEDMAN (OIST), Masashi YOSHIMURA (OIST), Takuma YOSHIDA (OIST), Ian DONOHUE (Trinity College Dublin), Evan P ECONOMO (OIST)

Ⅲ. 代表理事（兼会長）と業務執行理事の選任について

2022年3月16日に2022年度臨時理事会と第1回理事会が行われ代表理事（兼会長）および業務執行理事が選任された。

1. 代表理事（兼会長）（任期2022年3月～2024年3月）
宮下 直
2. 業務執行理事（任期：2022年3月～2024年3月）
北島 薫（副会長、次期会長候補）
久米 篤（出版担当）
木村 恵（男女共同参画）
村岡 裕由（情報/INTECOL 担当）

Ⅳ. 書評依頼図書（2021年9月～2022年4月）

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局（office@esj.ne.jp）までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 西廣淳・瀧健太郎・原田守啓・宮崎佑介・河口洋一・宮下直著「人と生態系のダイナミクス5 河川の歴史と未来」（2021）152pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-18545-4
2. ジュリアン・ローダーほか著 鷲谷いづみ訳「生態学大図鑑」（2021）352pp. 三省堂 ISBN:978-4-385-16251-5
3. 近藤誠司編「日本の馬」（2021）208pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060245-7
4. 原慶太郎・菊池慶子・平吹喜彦編「自然と歴史を活かした震災復興」（2021）272pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060351-5
5. 綿貫豊著「海鳥と地球と人間」（2022）328pp. 築地書館 ISBN:978-4-8067-1629-7
6. 日本景観生態学会編「景観生態学」（2022）272pp. 共立出版 ISBN:978-4-320-05834-7
7. 浅野悟史著「地域の＜環境ものさし＞生物多様性保全の新しいツール」（2022）184pp. 昭和堂 ISBN:978-4-812-22122-8
8. 塚田英晴著「もうひとつのキタキツネ物語」（2022）360pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-063953-8
9. ワーウィック・ヴィンセント著占部城太郎訳「湖の科学」（2022）192pp. 共立出版 ISBN:978-4-320-05836-1

書評

服部薫編（2020）「日本の鰐脚類 海に生きるアシカとアザラシ」東京大学出版会 269pp. ISBN:978-4-13-060239-6 価格 6,900 円＋税

本書の表紙は、ユーモラスな表情をした鰐脚類の一種の顔面アップの写真であるが、この種が水族館などでもおなじみのアシカやオットセイではなく、漁業被害で問題になることも多いトドであることを知りまず驚いた。水族館や動物園では目にする事の多い彼らだが、自然界でどのように生き、また人と関わっているのか、その全貌を知る人は、たとえ生態学者といえども対象としている分類群が異なれば、難しいのではないだろうか。本書は、とすれば人との馴染みが薄いアシカやアザラシなどの鰐脚類を、生態学のみならず考古学や水産資源管理の面からも含め、最新の研究を紹介した総合的一冊である。

本書は最初に、序章として「日本に生息する鰐脚類」として分類や人間との関わりについて概説した後、大きく「進化と歴史」、「生態と生理」、「資源と管理」の3部から構成されている。各部内には合計12の章が展開されている。以下に各章について概説する。

第I部「進化と歴史」は、全3章から構成されている。第1章「鰐脚類の系統」では、鰐脚類の起源と進化を分子系統学的解析および形態学的な研究によって明らかにされた知見を網羅的に紹介している。第2章「鰐脚類の適応進化」では主に化石記録を中心に鰐脚類の系統進化について詳述している。上記2章を通読するだけで、鰐脚類がたどった進化の歴史の概要を知ることができたと思わせるほど、内容が濃い。第3章「鰐脚類と考古学」では、ここまでの生物学的側面の研究と打って変わり、考古資料から解き明かす鰐脚類と人間との関わりについて論じられており、生態学とは別の視点から鰐脚類の研究を見ることが出来る。

第II部「生態と生理」は、全5章から構成されている。第4章「回遊する鰐脚類」では、日本近海ではほとんど上陸しない回遊性のキタオットセイを題材に、回遊を調べる手法の歴史を中心として、様々な手法で地道に明らかになった生活史の一部を紹介している。第5章「定住する鰐脚類」では、キタオットセイとは真逆の生活史をもつゼニガタアザラシの生活史を詳述している。定住性があることにより地理的な遺伝的偏りが生じ、北海道の中でも襟裳岬の辺りと道東の集団の間に遺伝的違いが見いだされていること、さらに北海道のゼニガタアザラシは少なくとも2回の移入が示唆されているなど、キタオットセイと対比することで生活史の違いから大きく異なる歴史をたどっていることが目の当たりにされ、大変興味深く読むことができた。第6章「潜水とエネルギー」では、鰐脚類が水陸両用の独特の生活史をもつ点に着目し、潜水行動と生態系への影響、そしてエネルギーに関する生理学的視点からみた研究を紹介している。第7章「音声コミュニケーション」では、鰐脚類の水陸両用の独特

の生活史を、本章では繁殖様式と音声コミュニケーションの視点から行った研究を紹介している。どうやら鰭脚類は他個体から音声を学習する能力を持っているとのことであり、その検証やメカニズムの解明に取り組んだ話題を紹介している。第8章「鰭脚類の食性」では、北海道における食性研究の概要を紹介し、生態系の上位に位置する鰭脚類がどのような摂餌戦略をとっているかについて詳述されている。

第三部「資源と管理」は、全4章から構成されている。第9章「海獣猟業と資源管理」ではキタオットセイに、第10章「鰭脚類の保護と管理」ではゼニガタアザラシに、そして第11章「鰭脚類と漁業」ではトドに着目し、どのように人と関わっているか、そして学術的な知見を基盤に、今後どうあるべきかについて語られている。最後に、終章「鰭脚類研究へのいざない」では、これからの鰭脚類研究の展望が書かれている。

本書は、1章ごとの内容が濃く、また大変ボリュームがある。鰭脚類の研究の概要から最先端まで日本語で把握できることから、水族館や動物園での姿しか知らない私のようなものでも、野生下の鰭脚類の本来の姿の理解に大きな助けとなった。野生の鰭脚類に少しでも興味のある人にとっては、鰭脚類の「今」を知る上で役立つに違いない。

(龍谷大学生物多様性科学研究センター 伊藤 玄)

島田卓哉著「野ネズミとドングリ タンニンという毒とうまくつきあう方法」208pp. ISBN:978-4-13-063952-1 東京大学出版会 価格 3,400 円+税

ネズミほどドングリの似合う生き物はいない、と言うと語弊があるだろうか。後肢とお尻でちょこんと座り、小さな両手(前肢)でドングリを掲げ持ち、細かく持ち替えながらいそがしく器用に歯で皮を剥がしていく。拾ったその場で食べるときは、その間も耳は四方への警戒を怠らない。本書のメインキャストである日本固有種のアカネズミは、「ネズミらしい」長い尻尾と赤茶色のサテンのように輝く毛並みを持つ、しなやかですばしこい野ネズミだ。成体の体長(鼻先から尾の付け根まで)は10~13 cm、片方の手の上にちょうど収まるサイズの、この小さな生き物は、日本で最も数の多い哺乳類で、著者による控えめな推定でも日本の森林に3億7千万匹以上生息する。雑食性で、主には植物の種子や果実、塊茎などのでんぷん質を多く食べているが、中でもコナラ類のドングリへの依存は日本各地で大きいという。しかも、秋から冬にはドングリの実を、春にはその芽生えも食べ、予想以上に長い期間ドングリを利用しているというから、その関係性の強さが見て取れる。身体にしては大きなドングリを熱心に食べているときの、小刻みに細かく揺れる小さな後頭部は、想像するだけでも愛らしい。

これほどにドングリが似合い、野外でもドングリへの依存が明らかなアカネズミであるが、著者は、ミズナラのドングリを食べたアカネズミが弱って死んでしまう奇妙な事件に遭遇する。そして、この事件(「アカネズミ—ドングリ問題」)を端緒に、足掛け20年、樹に枝葉を

茂らせるように、あるいは「玉葱の皮を一枚一枚はがすように」、ドングリを利用する野ネズミの生き方に多角的に、そして深く迫っていくことになる。一つの謎が解けたら次へ、そしてさらにその先へ。本書では、研究者なら誰もがうらやむような、著者がたどった一連の生態学的謎解きの連鎖を心行くまで楽しめる。

詳細は本書を読んでいただくとして、本書前半では、アカネズミ—ドングリ問題の背後に、タンニンという植物の被食防衛物質が侮れない毒性物質としてドングリに存在すること、そして、野ネズミたちは第一に生理的メカニズム、第二に採餌行動の可塑性をもってタンニンに対処していることが明らかにされる。後半では、野ネズミの採餌選択のみならず個体群動態(の少なくとも一部)までもがタンニンの影響下にあることが示される。こう書いてしまうと簡単だが、これらの解明の過程には、著者自身「さながらロードムービーのように」と表現する、研究を彩るエピソードが随所に挿入されている。ネズミ用人工飼料の開発や、家族総出の10キロ以上のドングリ集め、ネズミの唾液集めの試行錯誤、ひいては1万個のドングリのマーキングと追跡など、仮説の提案と検証実験のワクワク感にとどまらない研究の面白さ(≒大変さ?)を垣間見て、目をみはったり微笑んだりすることは間違いない。

話をタンニンと野ネズミに戻そう。本書の最後に語られるとおり、野ネズミ個体数の増減は、食物網やマダニ類の密度を介して、森林生態系の種間相互作用構造の動的な変化やヒトにおける人獣共通感染症リスクをもたらす可能性がある。植物のつくるたった一種類の化合物が(もちろんこれがすべての要因ではないだろうが)これほどまでに生態系のダイナミクスに影響する可能性を秘めているとは、その事実には改めて驚きを隠しえない。著者は、アカネズミ—ドングリ問題をテーマに研究を始めた当初、まだ「この(アカネズミ—ドングリ)問題の重要性について懐疑的だった」と告白する。しかし著者自身、「アカネズミとドングリとの謎に出会っていなかったら、私はどうしていただろうと思うことがある」と述懐するとおり、一読者としても、筆者のこの出会いと、その後の研究の継続に感謝したくなる。生き物の間の動的なつながりの秘密に迫ることができた実感する喜びはひとしおであろう。

テーマとの出会いに加え、著者は人との出会いに感謝を惜しまない。縁あつての様々な出会いを大切に、丁寧に注意深く研究を進めていく姿勢の重要さを実感できる本書は、研究の方向性に悩むすべての若手研究者へのエールとしても読んでいただけたと思う。もし一つだけあえて懸念を述べるなら、あまりにも完成された成果に、野ネズミ研究を志す若手がしり込みしてしまわないか、という点であろうか。著者には、そんなことは絶対ない、と一蹴されそうであるが。

(森林総合研究所 中村祥子)

光合成は、生態系を支える土台として、生態学者であれば誰でも知っている過程です。陸上生態系においては、光合成は主に維管束植物によって行われており、概ね植物＝光合成する生物、動物＝光合成しない生物という単純化した見方がなされています（最近では、光合成しなくなった植物に注目が集まっていますが）。光合成は重要な学習項目として小学校から教えられており、中学校では、光合成は光を利用して細胞中の葉緑体で行われ、二酸化炭素と水からデンプンと酸素が生じる反応であること、また、気孔を通じて蒸散を伴って気体の出入りが生じていることを学習し、光合成に影響を与える環境要因についても扱っています。高校では、葉緑体の構造や光エネルギーの吸収、光合成に関わる生化学的反応過程、さらに細菌の光合成や生態系における物質生産とエネルギーの流れまでを学習します。つまり、生態系における光合成の主要な概念は、高校までに一通り学習することになります。ミトコンドリアと葉緑体が共生微生物由来であるという説明が加わったとはいえ、光合成に関する高校までの教育内容は、30年以上大きな変更がありません。そのため、一般には光合成は完成された学問分野であると捉えられているかもしれません。実際、日本生態学会の研究発表でも、種多様性や動物-植物相互関係、遺伝子関連、物質循環の研究など、他の研究分野と比較すると、光合成過程に関わる研究はかなり少なくなっています（絶滅危惧状態?）。しかし、世界の光合成研究は大きく発展・深化しており、しかも肝心な部分の解明はこれからという状態です。日本は最新の光合成研究について、世界でもトップクラスの実績を誇っていますが、そのことが意識される機会は多くありません。

多くの生態学者の光合成に対する認識が、高校生物程度で止まってしまっていることの理由の一つは、光合成に関する日本語の教科書や解説書があまり出版されていないことかもしれません。大きな書店の店頭でも（また、Amazonでも）、光合成がタイトルに含まれる本はほとんど販売されていません。現在、生態学者が光合成について理解しようとする場合、入門書としてブルーバックスの「光合成とは何か 生命システムを支える力」¹⁾、学部レベルの教科書として「植物の生態-生理機能を中心に-」²⁾ くらいしかありません。さらに進んだ本としては「光合成の科学」³⁾ がありますが、専門書としては内容がやや古くなっています。一方、光合成の植物生理学的な詳細については、植物生理学や生化学の教科書（例えば、「テイツ/ザイガー 植物生理学・発生学 原著第6版」⁴⁾）を勉強することになりますが、このレベルになると脱落者が出てきそうです。この様な状況の中、本書「光合成」は、日本光合成学会の会員が中心となって執筆・編集し、光合成について幅広い分野を網羅的に取り上げ、最新の情報をコンパクトにまとめ、辞典的にも利用できる内容となっています。

光合成に関連する研究分野は多岐にわたっています。生態学、進化学、地球科学、有機化学、物理化学などの

学問分野、さらにはリモートセンシング、森林科学、作物栽培、人工光合成など技術的な応用も含まれます。また、光合成の過程については、光の吸収、光化学反応、電子伝達反応、光リン酸化反応、炭酸同化反応など、生態学分野ではあまりなじみのない様々な反応過程が一つのシステムとして統合されており、光合成を行う生物は、陸上植物以外にも、光合成細菌、シアノバクテリア、藻類など多様で、様々な生態系に存在します。本書は4部32章プラス4コラムから構成され、これら幅広い光合成研究をほぼ網羅しています。各章はそれぞれの分野の専門家によって執筆され、編集者や著者間で相互査読が行われ、大変信頼できる内容となっています。本書は、大判（B5）の薄い本で、質の高いカラー図が多数掲載されています。そのため、光合成の入門書的な内容と勘違いされるかもしれませんが、各章の情報密度は非常に高く、最新の研究に関する文献も多数引用されており、光合成学習者・研究者のためのリファレンス的な内容となっています。一方、執筆者のほとんどが植物生理学者のため、実際のフィールドにおける光合成研究があまり意識されておらず、植物生理生態学の観点からみた場合、違和感のある書き方がなされている部分もあります。そのため、本書の内容と実際の野外における植物の光合成との関係に関連付けることは初学者には難しいかもしれません。たとえば、「植物の生態-生理機能を中心に-」²⁾ や「植物と微気象（第3版）：植物生理生態学への定量的なアプローチ」⁵⁾ などの教科書をベースとして、個別項目の詳細確認のために本書を利用するというのは、野外の光合成過程を基本から理解する上で大変効果的でしょう。また、陸上植物の光合成測定については「植物の光合成・物質生産の測定とモデリング」⁶⁾ という優れた教科書や、Web公開されている「光合成研究法」⁷⁾ がありますが、それらに紹介されている測定原理を理解する上で、本書は大変役立つでしょう。

本書の編集者達は、各章の専門家による記述内容を調整し、まとまりのあるコンパクトな本に仕上げるために、最終段階まで相当努力されたことが推察されます。その結果、全体として一冊の教科書として通読できるレベルに仕上がっています。これは、日本光合成学会によって公開されているWeb版「光合成事典」⁸⁾ と比較して優れた点だと思います（ただし、第1刷の段階では、各章の相互引用情報には誤りが多数残っていますので、注意が必要です）。個人的には、最後に追加されたと思われる第I部第3章“葉肉細胞以外で行われる光合成”、すなわち茎や花、果実、種子、根などによる光合成のまとめが興味深く、第II部第6章“電子伝達系”、第14章“藻類の葉緑体構造と海洋一次生産”第15章“藻類のCO₂濃縮機構”、第III部“光合成の環境応答”は、大変勉強になりました。

「光合成」はこれまでの関連書籍にはなかった包括的な構成と最新の内容を記述した世界的にも優れた画期的な専門書です。光合成について深く理解したい学習者にとって必携の本であると同時に、ある程度の専門家にとっては体系的に最新の知識を得るための最適な本となっています。この様な優れた光合成の本が出版されたこと

を、本当に嬉しく思います。本書が講義や研究に幅広く活用され、日本の生態学の発展につながることを願っています。

引用文献

- 1) 「光合成とは何か 生命システムを支える力」園池公毅 (2008) 講談社
- 2) 「植物の生態－生理機能を中心に－」寺島一郎 (2013) 裳華房
- 3) 「光合成の科学」東京大学光合成研究会編 (2007) 東京大学出版会
- 4) 「テイツ／ザイガー 植物生理学・発生学 原著第 6

- 版」Lテイツ、Eザイガー他 (2017) 講談社
- 5) 「植物と微気象 (第 3 版): 植物生理生態学への定量的なアプローチ」HG ジョーンズ (2017) 森北出版
 - 6) 「植物の光合成・物質生産の測定とモデリング (生態学フィールド調査法シリーズ)」彦坂幸毅 (2016) 共立出版
 - 7) 「光合成研究法」(http://www.lowtem.hokudai.ac.jp/plantadapt/photosynthesis_way-j.html)
 - 8) 「光合成事典」(<https://photosyn.jp/pwiki/index.php>)

(九州大学大学院農学研究院 久米篤)

一般社団法人日本生態学会
役員・代議員・委員一覧

代表理事（会長） 宮下 直 2022.3 ~ 2024.3
業務執行理事
（副会長・次期会長候補）

北島 薫 2022.3 ~ 2024.3
（専務理事） 大塚 俊之 2021.3 ~ 2023.3
（庶務担当） 佐々木雄大 2021.3 ~ 2023.3
（会計担当） 本庄 三恵 2021.3 ~ 2023.3
（出版担当） 久米 篤 2022.3 ~ 2024.3
（男女共同参画） 木村 恵 2022.3 ~ 2024.3
（情報/INTECOL） 村岡 裕由 2022.3 ~ 2024.3

理事（2022.3 ~ 2024.3）

吉田 丈人 近藤 倫生
辻 和希 鏡味麻衣子
佐竹 暁子 日浦 勉
酒井 章子 工藤 岳
小泉 逸郎 鈴木 牧
中野 伸一 和田 直也

監事

永松 大 2021.3 ~ 2023.3
瀧本 岳 2022.3 ~ 2024.3

代議員（2021.12 ~ 2023.12）

全国代議員 相場慎一郎 石川 麻乃
小野寺雄介 鏡味麻衣子
北島 薫 工藤 岳
黒川 紘子 小泉 逸郎
近藤 倫生 酒井 章子
佐竹 暁子 辻 和希
日浦 勉 森 章
吉田 丈人
地区代議員 小林 真（北海道） 彦坂 幸毅（東北）
鈴木 牧（関東） 北村 俊平（中部）
潮 雅之（近畿）
市栄 智明（中国・四国）
細川 貴弘（九州）

Ecological Research 編集委員会

Editor-in-Chief 鈴木 準一郎
Deputy Editor-in-Chief 富松 裕
Associate Editors
in-Chief Ming Dong 江成 広斗
深澤 圭太 兵藤不二夫
稲垣 善之 川津 一隆
小林 真 Bo Li
Zhijun Ma 牧野 渡
中路 達郎 及川 真平
長田 典之 大澤 剛士
阪口 翔太 瀧本 岳
横川 太一

Handling Editors

馬場 友希 Min Cao
Jae Chun Choe Franck Courchamp
Stuart J. Davies
Guillaume Echevarria
Jingyun Fang Yunting Fang
Jan Frouz 藤井 佐織
福井 大
Raghavendra Gadagkar
Rebecca Gladstone-Gallagher
半場 祐子
平田 竜一 日浦 勉
Brenden Holland Sun-Kee Hong
市栄 智明 井田 崇
飯田 碧 今井 伸夫
David W. Inouye 石川 尚人
梶 光一 上條 隆志
加藤 知道 Eun-Shik Kim
北村 俊平 小林 和也
工藤 洋 松井 一彰
松尾奈緒子 松崎慎一郎
村上 正志 中村 誠宏
仲澤 剛史 Tsewang Namgail
西村 欣也 仁科 一哉
Ariel Novoplansky 大橋 瑞江
岡部貴美子 大園 享司
Pil Sun Park
Nishanta Rajakaruna
Serena Rasconi Sergio R. Roiloa
Samuel R. P. -J. Ross 斎藤 琢
坂田 ゆず 佐々木雄大
佐藤 一憲 佐藤 拓哉
Stephen D. Sebestyen Bo Song
Janne Sundell 高田まゆら
高田 宜武 高木 俊
高巢 裕之 Cindy Q. Tang
Arndt Telschow 角田 裕志
内井喜美子 Edward Vargo
Ping Xie 山尾 僚
安田 仁奈

日本生態学会誌編集委員会（2020.1 ~ 2022.12）

編集委員長 永光 輝義
編集幹事 安房田智司 相場慎一郎
島野 光司 小林 剛
伊東 明 村岡 裕由
三宅 崇 高田 宜武
箱山 洋 土田 浩治
村上 貴弘 東樹 宏和
佐久間大輔 和穎 朗太
笠原 玉青 保原 達
大澤 剛士 松林 圭
立木 佑弥 山浦 悠一
草刈 秀紀 嶺田 拓也

富田 涼都 白川 勝信

保全生態学研究編集委員会 (2021.1 ~ 2023.12)

編集委員長 小池 文人
 編集幹事 丑丸 敦史
 編集委員 天野 達也 西廣 淳
 石濱 史子 赤坂 宗光
 岩井 紀子 市野川桃子
 岡野 隆宏 大澤 剛士
 角谷 拓 金子 信博
 河口 洋一 岸本 康誉
 北村 亘 楠本 良延
 小池 伸介 五箇 公一
 小山明日香 今藤 夏子
 佐伯いく代 佐々木雄大
 鈴木 覚 曾我 昌史
 高田まゆら 立原 一憲
 露崎 史朗 東城 幸治
 戸田 光彦 中濱 直之
 根岸淳二郎 松崎慎一郎
 森田健太郎 山浦 悠一
 横溝 裕行

自然保護専門委員会 (2022.4 ~ 2024.3)

委員長 和田 直也：中部
 副委員長 奥山 雄大：関東
 大久保奈弥：海洋
 関島 恒夫：気候変動対策と環境影響
 評価
 幹事 神山 智美：環境法
 地区選出委員
 露崎 史朗：北海道
 早矢仕有子：北海道
 星崎 和彦：東北
 黒沢 高秀：東北
 亘 悠哉：関東
 増田 理子：中部
 古賀 庸憲：近畿
 中井 克樹：近畿
 岡 浩平：中国・四国
 伊谷 行：中四・四国
 久保田康裕：九州
 高嶋 敦史：九州
 平田 令子：九州
 増沢 武弘：高山・亜高山
 竹門 康弘：陸水
 加藤 真：海洋
 清水 善和：島嶼
 久保田康裕：熱帯・亜熱帯
 横畑 泰志：寄生物
 阿部 晴恵：遺伝子
 常田 邦彦：鳥獣管理
 矢原 徹一：海外渉外
 安溪 遊地：エネルギー問題

専門別委員

角野 康郎：湿地
 水谷 瑞希：MAB
 五箇 公一：環境行政（外来種）
 吉田 正人：環境政策（自然公園／種の保存法）
 村上 興正：環境政策（外来種）

将来計画専門委員会 (2022.4 ~ 2024.3)

委員長 佐竹 暁子
 副委員長 酒井 章子
 辻 和希 巖佐 庸
 粕谷 英一 石井励一郎
 田中 健太 小泉 逸郎
 立木 佑弥 三木 健
 北島 薫 塩尻かおり
 彦坂 幸毅 黒川 紘子
 土居 秀幸 山道 真人
 佐藤 拓哉 石川 麻乃
 鈴木 貴俊 大竹裕里恵
 藤岡 春菜 矢原 徹一

生態学教育専門委員会 (2022.4 ~ 2024.3)

委員長 中田 兼介
 副委員長 丑丸 敦史
 非教育学部系枠：
 嶋田 正和 畑田 彩
 西脇 亜也
 教育学部系枠：
 平山 大輔 三宅 崇
 中井 咲織
 高校教員枠：宮田 理恵 佐賀 達矢
 博物館枠：澤邊（中村）久美子 小林 誠

大規模長期生態学専門委員会 (2022.4 ~ 2024.3)

委員長 大手 信人
 石原 正恵 伊東 明
 内海 俊介 黒川 紘子
 木庭 啓介 中野 伸一
 中村 誠宏

生態系管理専門委員会 (2022.4 ~ 2024.3)

委員長 西廣 淳
 副委員長 鎌田 磨人 吉田 丈人
 幹事 橋本 佳延
 （キャパシティビルディング部会担当）
 西田 貴明（調査・提言部会担当）
 キャパシティビルディング部会：
 赤石 大輔 伊藤 浩二
 上野 裕介 大野 ゆかり
 大脇 淳 上崎 聰敏
 白川 勝信 矢原 徹一
 調査・提言部会：
 岩崎 雄一 大澤 隆文
 小笠原奨悟 佐々木章晴

高川 晋一	高村 典子
中村 太士	古田 尚也
松田 裕之	山下 慎吾

日本生態学会賞・宮地賞・大島賞・奨励賞選考委員会

小野田雄介	鏡味麻衣子
佐竹 暁子	石川 麻乃
大橋 瑞江	森 章

大会企画委員会

委員長	細 将貴
副委員長	大澤 剛士
運営部会	才木真太郎
	高野 (竹中) 宏平
	橋本 洸哉
	松岡 俊将
	立木 佑弥
	潮 雅之

シンポジウム部会

大館 智志	小林 卓也
徳田 誠	京極 大助
渡部俊太郎	境 優
東 若菜	入谷 亮介
今井 伸夫	田邊 晶史
小林 知里	

ポスター部会

服部 充	平野 尚浩
平山貴美子	松橋彩衣子
長谷川成明	山尾 僚
江川 知花	中西 希
細川 貴弘	山下 聡
島田 直明	樋口裕美子
柴田あかり	小出 大
友常 満利	

高校生ポスター部会

望月 昂	勝原 光輝
城野 哲平	宮崎 佑介
佐賀 達矢	坂田 ゆず
酒井 聡樹	鏡味麻衣子
中濱 直之	中原 亨
山崎 曜	小峰 浩隆
宮田 理恵	桜井 良

発表編成部会

富松 元	松崎慎一郎
赤坂 卓美	源 利文
森 英樹	榎木 勉

英語口頭発表部会

辰巳 晋一	上村真由子
入谷 亮介	森井 悠太
福森香代子	水元 惟暁
門脇 浩明	畑 啓生
塩尻かおり	小林 真

野外安全管理専門委員会

委員長	石原 道博	2022.4 ~ 2024.3
	鈴木準一郎	2022.4 ~ 2024.3
	粕谷 英一	2022.4 ~ 2024.3
	北村 俊平	2022.4 ~ 2024.3
	大館 智志	2021.4 ~ 2023.3
	飯島 明子	2021.4 ~ 2023.3
	奥田 昇	2021.4 ~ 2023.3

キャリア支援専門委員会 (2022.4 ~ 2024.3)

委員長	上野 裕介	
副委員長	高野 (竹中) 宏平 (男女共同参画)	
副委員長	成田 あゆ (キャリア支援)	
	河内 香織	小山 耕平
	鈴木 智之	曾我 昌史
	西田 貴明	沼田 真也
	高田まゆら	宮脇 成生
	東樹 宏和	木村 恵
	鈴木 牧	小泉 逸郎
	荒木希和子	中臺 亮介
	諸澤 崇裕	幸福 智

オブザーバー

可知 直毅	黒瀬奈緒子
塩尻かおり	富田 基史
半場 祐子	森田健太郎
別宮 (坂田) 有紀子	三宅 恵子
寺田 佐恵子	

情報交流支援専門委員会 (2021.4 ~ 2023.3)

委員長	村岡 裕由	
	大澤 剛士	長谷川 功
	森田健太郎	

男女共同参画学協会連絡会幹事学会タスクフォース (2022.3 ~ 2023.12)

委員長	半場 祐子	
副委員長	可知 直樹	三宅 恵子
	池本 美都	宇野 裕美
	久野 真純	斎藤 裕美
	Firouzeh Javadi	曾我 昌史
	Hubert Cheung	堂園いくみ
	藤田 剛	本郷 峻
	満行 知花	三谷 曜子

オブザーバー

木村 恵	上野 裕介
高野 (竹中) 宏平	

理事会連絡担当

佐々木雄大

英文誌出版タスクフォース (2022.3 ~ 2023.7)

委員長	久米 篤	
	大塚 俊之	本庄 三恵
	陶山 佳久	鈴木準一郎
	富松 裕	黒川 紘子

楠本聞太郎 角田 智詞
大原 雅 山内 淳
三宅 崇

大会将来像検討タスクフォース (2022.3 ~ 2023.3)

委員長 占部城太郎 佐竹 暁子
木村 恵 吉田 丈人
高橋 佑磨 内海 俊介
松永 大

データベース検討タスクフォース (2022.3 ~ 2023.9)

委員長 内海 俊介
大澤 剛士 大手 信人
久米 篤 黒川 紘子
佐々木雄大 陶山 佳久
村岡 裕由

ESJ70 運営検討タスクフォース (2022.3 ~ 2023.3)

委員長 大塚 俊之
宮下 直 北島 薫
佐々木雄大 本庄 三恵
細 将貴 大澤 剛士
河田 雅圭 彦坂 幸毅
吉田 丈人 占部城太郎
佐竹 暁子 高橋 佑磨



京都大学 生態学研究センター

Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3
Tel: (077) 549-8200 (代表), Fax: (077) 549-8201
センター長 中野 伸一

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page: <https://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

令和4年度に入り、生態学研究センター（以下、当センター）に新しい教員が加わりました。これは、京都大学霊長類研究所の改組に伴う教員の移籍によるもので、半谷吾郎准教授および田中洋之助教の2名が、当センターの教員として今年の4月以降の当センターの活動に加わります。また、これに伴い、当センターの協力講座に新たな分科である「生態科学 III」を新設いたしました。これにより、当センターは生態科学 I（動物学系）、生態科学 II（植物学系）、生態科学 III（霊長類学・野生動物系）の3つの分科から成る協力講座として、理学研究科とともに生態学の教育研究をさらに充実させます。これからもご支援のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

新たな教員の加入と分科の設置 について

中野 伸一

2022年度 センター活動予定

生態学研究センターにおける2022年度の活動予定は以下の通りです。

センターニュース、セミナーなど、センターの最新情報は、ホームページ (<https://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>) で公開しています。

なお、新型コロナウイルスの影響により本稿に掲載されている予定については変更の可能性があります。ご了承ください。

1. プロジェクト

創発的研究支援事業 (JST) (2件)、ムーンショット型研究開発事業 (NEDO) (1件)、連携研究スキームによる研究 (農水省) (1件)、科学研究費助成事業による研究 (36件)、民間財団寄附金による研究 (4件) などが進められている。

2. 協力研究員

引き続き、協力研究員 (Affiliated Scientist) を公募する。

3. 共同利用・共同研究事業 (次頁の表を参照)

2022年度の共同利用・共同研究事業 (予算措置のあるもの) として、分野間の交流や若手研究者育成の観点などから、1件の国際共同研究、5件の共同研究 a、3件のワークショップを採択した。ワークショップの開催日程などの詳細は、当センターのホームページに掲載する。

また、共同研究 b・資料利用は随時募集を行う。

4. 生態研セミナー

毎月第三金曜日に、センター外の方々も自由に参加できるセミナーを開催している。本セミナーは京都大

学生態学研究センターにて開催し、会場への直接参加による視聴 (会場への道順はセンターのホームページ参照) と合わせて、講師の同意が得られる場合には Web 上でもセミナーのリアルタイム配信を行なっている。ただ、この間は COVID-19 の影響により会場で講演を行うことは中止し、Zoom を用いたオンラインセミナーとしてのみ開催している。これについても Web 配信に準じて扱い、講師の同意が得られる場合には外部に公開している。詳細についてはセンターホームページでご確認ください (なおオンラインでの視聴には事前申込が必要です)。

5. ニュースレターの発行

これまで年2回 (7月、1月) 冊子体として発行してきたセンターニュースは次号7月号より原則オンライン化し、センターのホームページにて内容を公開する。発行のお知らせとしては、希望者にメール配信をする (次頁にメール配信登録の URL 掲載)。ただし、公的機関等へは、これまで通り冊子体版もお届けする。センターの活動紹介の他、研究の自由な討議の場を提供していきたい。

6. オープンキャンパス、公開授業

4月4日に、大学院入試案内のためのオープンキャンパスを開催した。

京都大学では、遠隔地教育研究施設による公開講座等を集中して実施する京大ウィークスを毎年行っている。センターはその一環として10月に、一般公開「学校で習わない生き物の不思議」の開催を予定している。日程などはセンターホームページに掲載し周知する。

7. 共同利用施設

大型分析機器：DNA 関係では DNA 多型解析、遺伝子転写定量解析用機器など、安定同位体関係では、炭素・窒素同位体比オンライン自動分析装置（元素分析計）、酸素・水素同位体比オンライン自動分析装置（熱分解型元素分析計）、GC/C（ガスクロ燃焼装置付き前処理装置）、高速液体クロマトグラフ付き前処理装置を装備した安定同位体比質量分析計 delta V plus と、PreCon-GasBench II（自動濃縮装置付き気体導入インターフェイス）、元素分析計、GC/C を装備した安定同位体比質量分析計 delta V advantage の計 2 台が稼働している。

琵琶湖観測船：高速観測調査船「はす」、「エロディア」が稼働しており、観測調査、実習に利用される。これらの船舶は、旧センター所在地（下阪本）に係留されている。

実験圃場林園：センター敷地内には、実験圃場、樹種植栽林園、林木群集実験植物園、CER の森、実験池があり、種々の野外実験に利用されている。

上記施設・設備の利用希望者は、事前に以下の担当者に連絡してください。

DNA シーケンサー等関係：工藤・本庄
安定同位体関係：木庭
観測船関係：合田
実験圃場林園関係：酒井

8. 運営委員会、共同利用運営委員会

昨年度と同様、それぞれ数回開催される予定である。

● 2022 年度 国際共同研究・共同研究 a・ワークショップ・研究集会 採択申請一覧 ●

申請者	所属	申込内容	研究課題
槻木 玲美	松山大学・法学部	国際共同研究	堆積物 DNA を用いた動物プランクトンの長期動態に関する研究
清水（稲継）理恵	Department of Evolutionary Biology and Environmental Studies, University of Zurich	共同研究 a	倍数化によるエビゲノム進化と環境適応
鈴木 啓太	京都大学・フィールド科学教育研究センター（舞鶴水産実験所）	共同研究 a	冬春季の降水パターンが沿岸植物プランクトンに与える影響
佐伯 いく代	筑波大学・生命環境系	共同研究 a	安定同位体分析を用いた外来ナメクジ類の食性の解明
金子 信博	福島大学・食農学類	共同研究 a	北海道道東地域の森林溪流に含まれる硝酸態窒素の起源の解明
西尾 治幾	滋賀大学・データサイエンス教育研究センター	共同研究 a	比較トランスクリプトーム・エビゲノムによる植物の適応進化の解析
中野 伸一	京都大学 生態学研究センター	ワークショップ	若手研究者のための河川観測プログラム
木庭 啓介	京都大学 生態学研究センター	ワークショップ	脱窒菌同位体比測定法ワークショップ 2022
木庭 啓介	京都大学 生態学研究センター	ワークショップ	安定同位体生態学ワークショップ 2022



受賞者名	受賞名	受賞研究課題・受賞講演名・受賞論文等
潮 雅之	令和 3 年度科学技術分野の文部科学大臣表彰 若手科学者賞	「野外生態系動態の制御機構に関する研究」
鈴木 紗也華	第 68 回日本生態学会 ポスター賞（動物群集・最優秀賞）	「節足動物群集の DNA メタバーコーディングから被食 - 捕食ネットワークの季節動態へ」
木下 桂	第 68 回日本生態学会 ポスター賞（動物群集・優秀賞）	「安定同位体微量測定を用いた淡水寄生虫類の体サイズと栄養段階の関係」
鈴木 紗也華	第 65 回日本応用動物昆虫学会 ポスター賞	「DNA メタバーコーディングを用いた草原性クモ群集の被食 - 捕食ネットワークの季節動態と種特異性の評価」
辻 かおる	第 25 回日本生態学会 宮地賞	「群集のなかの雌雄差」
木下 桂	JpGU Meeting 2021 生物地球化学セッション ポスター優秀賞	「Comparison of isotopic enrichment among taxonomic group of freshwater parasites using stable isotope microanalysis」
本庄 三恵	第 15 回種生物学会 片岡奨励賞	「ウイルス生態学：自然環境下におけるウイルスの動態と宿主相互作用の研究」

生態学研究センターニュースは 2022 年 7 月号より
オンライン版に移行します

センターニュースはバックナンバーを含め、センターホームページの以下の URL からご覧いただけます。

<https://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/newsletter.html#ct3>

センターニュースメール配信登録のお願い

センターニュース発行のメール配信登録、配信先の変更、配信停止等をご希望の場合は、インターネット上の以下のフォームより必要事項のご入力をお願いいたします。

<https://ws.formzu.net/fgen/S75832635/>



◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。

新年度の会費は9～12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。

退会する際は前年12月末までに退会届を会員業務窓口まで提出してください。

会費を1年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

会員種別	基本会費*	大会発表	選挙・被選挙権 (役員・代議員)
正会員（一般）	9500円	○	○
正会員（学生）	4500円	○	○
賛助会員	年会費 20000円／22000円	×	×

*生態学会では収入の少ない一般会員のために、学会費・大会参加費を学生会員と同額にする措置を実施しています。
詳細はウェブサイトをご覧ください。

【論文投稿の権利】

- | | |
|----------------------|-----------------|
| ・日本生態学会誌 | 正会員のみ有 |
| ・保全生態学研究 | 投稿権利は会員に限定されません |
| ・Ecological Research | 投稿権利は会員に限定されません |

【冊子配布を希望する会誌の追加費用】

- | | |
|----------------------|--------|
| ・Ecological Research | 8,000円 |
| ・日本生態学会誌 | 2,000円 |
| ・保全生態学研究 | 2,000円 |

【非会員に向けた学会誌(冊子体)定期購読料】

- | | |
|----------|--------|
| ・日本生態学会誌 | 5,000円 |
| ・保全生態学研究 | 5,000円 |

問い合わせ先：一般社団法人日本生態学会 会員業務窓口

〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター

E-mail: esj-post@bunken.co.jp

Tel: 03-6824-9381 Fax: 03-5227-8631